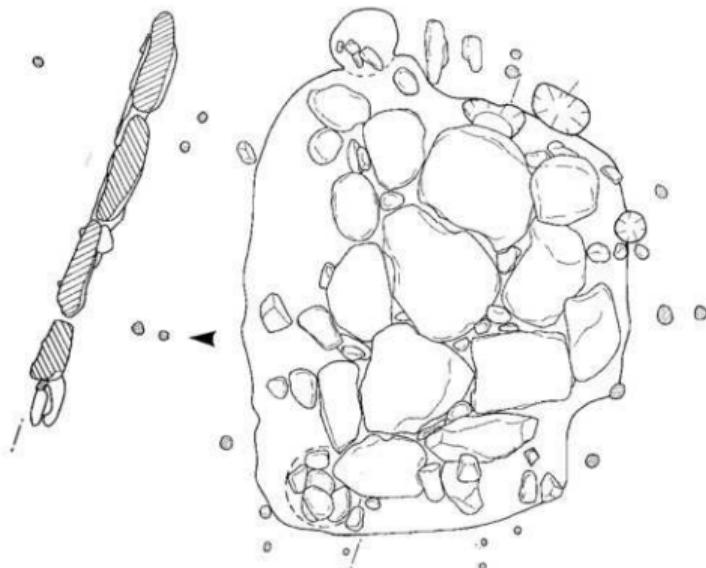


県営圃場整備事業に伴う
下手遺跡発掘調査報告書



1993年3月

匹見町教育委員会

県営圃場整備事業に伴う
下手遺跡発掘調査報告書

匹見町教育委員会

1993年3月

例　　言

1. 本書は島根県益田農林事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成4年度に行った匹見地区県営圃場整備事業に伴う、下手遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　島根県教育委員会文化課

島根大学法文学部教授　田中義昭

広島大学文学部助教授　河瀬正利

山口大学人文学部教授　中村友博

事務局　匹見町教育委員会教育長

齊藤惟人

匹見町教育委員会教育次長　渡辺隆

匹見町教育委員会社会教育主事　佐々木厚造

調査担当者　匹見町教育委員会文化財保護専門員　渡辺友千代

調査補助員　大賀幸恵、大谷百合子、榎原博英

調査参加者　栗田定、三嶋忠俊、森清、森脇雅夫、沼田古雄、原田頼二

落田政人、渡辺照、齐藤直行、中間昭二郎、山崎リマヨ

森脇一枝、長谷川時子、溝田久子、大城法子

3. 発掘調査に際しては、益田農林事務所の平岡昭博・桐木俊介氏をはじめ、土地所有者、地元の方々に終始多人な協力をいただいた。また、遺物整理にあたっては、とくに山口大学人文学部の中村友博助教授、島根大学生の榎原博英氏らの協力を得た。ここに感謝の意を表したい。

4. 今回の調査では、柱穴状造構-P、土坑-SK、掘立柱建物-SBと略号した。

5. 紙数に伴って、図面・図版を省略したものもある。また本書の掲載図面等は、渡辺友千代・大賀幸恵・大谷百合子・大城法子・広川晴美らが各分担し、執筆・編集は調査員渡辺が、熱田貴保主事の指導のもとで行った。

目 次

第1章 弥生時代の匹見盆地と下手遺跡	(田中 義昭)	1
1.はじめに		1
2.匹見盆地の遺跡群とその特徴		1
3.弥生時代遺跡の分布		2
4.江田・半田遺跡群の構造		3
5.木戸開中遺跡に見る土地利用		4
6.下手遺跡が提起する課題		5
第2章 はじめに	(渡辺友千代)	7
第1節 位置と環境		7
第2節 調査に至る経緯		7
第3節 調査の経過		9
第3章 A調査区の概要	(渡辺友千代)	10
第1節 調査区の設定		10
第2節 層位		10
1.基本層序		10
2.層序状況と出土遺物		10
第3節 遺構		11
1.はじめに		12
2.各遺構の概要		12
第4節 出土遺物		30
1.はじめに		30
2.実測遺物		30
第4章 出土遺物	(渡辺友千代)	36
第1節 調査区の設定		36
第2節 層位		37

第3節 遺構	38
1. はじめに	38
2. 各遺構の概要	38
第4節 出土遺物	41
1. はじめに	41
2. 実測遺物	41
 第5章 終りにあたって	46
1. はじめに	46
2. 両調査区の概要	46
3. 配石遺構群について	47

図 表 目 次

第1図 北見中央部における弥生遺跡	2
第2図 遺跡位置図	7
第3図 遺跡配置図	8
第4図 土層図（A調査区）	11
第5図 遺構断面図1	11
第6図 遺構断面図2（SK01）	12
第7図 遺構断面図3（SK02）	12
第8図 遺構断面図4（SK06・SK66）	13
第9図 SK06実測図	15
第10図 SK05実測図1	19
第11図 SK05実測図2	20
第12図 SK05断面図	20
第13図 遺構図1	21~22
第14図 遺構図（西半）2	23~24
第15図 遺構図（東半）3	25~26
第16図 遺構図4	27~28

第17図 拡張区平面図	29
第18図 遺物実測図（土器）1	31
第19図 遺物実測図（土器・陶器）2	33
第20図 遺物実測図（羽口）3	34
第21図 遺物実測図（石器）4	34
第22図 土層図（B調査区）	36
第23図 住居址遺構図	37
第24図 遺構断面図	38
第25図 遺構図	39
第26図 土師器実測図	40
第27図 遺物実測図（土器）1	42
第28図 遺物実測図（土器）2	44
第29図 遺物実測図（石器）3	45
A調査区遺構計測表	17~18
B調査区遺構計測表	43

図 版 目 次

- | | | |
|------|------------------------|------------------|
| 図版 1 | 1. 遺跡遠望 | 2. 作業風景 |
| 図版 2 | 1. 配石・遺物出土状況（SK11） | 2. 層界に検出された遺構面 |
| 図版 3 | 1. SK17土杭状況（東から） | 2. SK08土杭状況（南から） |
| 図版 4 | 1. 調査区東半の立石状況（北東から） | 2. 焼土Ⅱ土杭状況（東から） |
| 図版 5 | 1. SK08検出状況 | 2. SK05検出状況 |
| 図版 6 | 1. 西から見たA調査区 | |
| | 2. 南西から見た配石遺構群（西半部） | |
| | 3. 西から見たSK05 | |
| | 4. 北から見たSK05 | |
| | 5. 真上から見たSK05 | |
| | 6. 北半部の配石を取り除いた状況（北から） | |
| | 7. 北半部の配石を取り除いた状況（西から） | |

8. 下層面状況（西から）

- | | | |
|------|---|-----------------|
| 図版7 | 1. 南西から見た配石遺構群（西半部） | 2. 西から見たA調査区全景 |
| 図版8 | 1. 繩文土器 | 2. 弥生土器(1) |
| 図版9 | 1. 弥生土器(2) | 2. 土師質・瓦器・羽口・鉄滓 |
| 図版10 | 1. 陶磁器 | 2. 石器 |
| 図版11 | 1. 土師器出土状況（B調査区）
2. 弥生土器出土状況（B調査区） | |
| 図版12 | 1. 中央トレンチに検出されたカマド址（B調査区）
2. 北から見たカマド址（B調査区） | |
| 図版13 | 1. 南から見た調査区（B調査区）
2. 黒褐色粘質土層に出土した土師器（B調査区） | |
| 図版14 | 1. 繩文土器・弥生土器（B調査区） | 2. 弥生土器（B調査区） |
| 図版15 | 1. 弥生土器（B調査区） | 2. 石器（B調査区） |

第1章 弥生時代の匹見盆地と下手遺跡

1.はじめに

中国地方西部の一川間盆地の匹見町域に、少なくない考古学的な遺跡の存在することが知られてからまだ日は浅い。この間水田構造の改良事業等とともになう種々の調査によって遺跡数は急速な増大をみせ、いまや匹見盆地は中国地方でも有数の埋蔵文化財包蔵地域となってきた。

これら数々の遺跡は、特徴的な自然環境と地域史の展開に即応して從来認識されてきた沿海地域のものとは様々に色合いの違いをもっており、その詳細な調査研究はきわめて注目されるところである。今回調査された下手遺跡も特異な構造を示し、匹見町地域の考古学的研究に新たなページを開こうとしている。この遺跡の性格ならびに意味あいを理解するための前提として、本章でまず匹見町域の遺跡群が示す諸様相と特徴点について述べておくこととしよう。

2. 匹見盆地の遺跡群とその特徴

匹見町域における遺跡分布とそれらが所属する時代からその特徴的な様相を、現状において指摘するならばおおよそ以下のようなことがいえると思う。

第1点としては、遺跡の集中性をあげる必要がある。1992年までに町域内で発見された遺跡の総数は約40数個所と聞くが、それらの大部分は計画的な調査が進行し始めた1980年代後半期の発見にかかわり、今後もかなりの遺跡が検出されることは間違いない。遺跡調査に直接・間接携わった経験からいえば、「現在の集落が位置する個所には必ず遺跡がある」といってよく、「どこを掘っても遺跡に遭遇する」ような状態を認識させられている。このことは盆地の自然環境が山間地といえども人間の居住に好適な条件を備えていたことを物語るものであろう。

第2点目には遺跡の重層性と継続性を指摘すべきであろう。道川新横原遺跡にみられるように、町域の黎明はやはり旧石器時代に遡り、その後の縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、さらに中・近世と、すくなくとも考古学的な手法で辿る地域史のすべての時代にわたる遺跡の所在が確認されている。この事実は、中央・周辺とか先進・後進、あるいは過密・過疎といった概念のみでは地域の歴史的動態と特性を正確に把握しえないことを示しているように思われる。

第3点は、これまでに調査された遺跡には從来中国地方ではあまり見聞されていないような構造をもつものが存在することである。このことは第1、第2の特徴点とも密接な関連を有していることであり、それら各遺跡が示す諸特徴の全面的な検討に立った総合的な把握と的確な地域史的意義の解明が求められる。

さて、1980年代の後半期から始まった町域の遺跡分布調査といいくつかの発掘調査では縄文遺跡が

多数検出されたことに加えて、石ヶ坪遺跡、水田ノ上遺跡等のように縄文社会の生活と地域間交流のありかたを具体的に解明するうえで貴重な手掛かりを与えるものが発見されたことを特記しなければならない。これら縄文遺跡の調査によって匹見盆地が広島県帝釈峡遺跡群等とともに山間部における縄文人の生産活動と生活の拠点的地域をなしていたことをまずもって確認しておくべきであろう。

われわれは、こうした縄文遺跡の集中と特徴的な遺跡の成立条件として、匹見川・広見川・紙祖川の合流が好適な河川漁業資源獲得の場を提供したことや周辺山地斜面には食用になる動植物資源が豊富に存在したことを想定できるとしてきた。さらにもう東西に走る断層の谷地形が格好の交通路をなしたということなどを推定したのであった。

ところで盆地内の縄文時代の遺跡群は、主としてその後期に形成されたものが多いのであるが、続く晩期にもそれらが継承されて、この時期としては比較的遺跡数の減少が認め難く思われるのも注目点の1つである。それと関連して打製石斧が数多く出土することが注意される。あるいは半田ヨレ遺跡で鳥形土製品が検出されたことも水田ノ上遺跡の大規模な配石遺構の存在などと合わせ考えると、盆地内における縄文終末期の様相にはまことに興味深いものがあるといえよう。

3. 弥生時代遺跡の分布

匹見盆地の遺跡群から得られていたわれわれの考古学的な理解の中で改めて訂正を迫られたのは弥生時代の遺跡が少なからず存在するということである。山間盆地であるから縄文時代の遺跡がみられるのは、一この点でも予想をはるかに上回ったのであるが一、ある意味で納得できるとして



1. 前田 2. 長グロ 3. 水田ノ上地区 4. 木戸開中 5. 福田ノ上 6. 塚田
7. 中善根 8. 江田平台 9. 平田 10. 筆田 11. ヨレ 12. イセ
13. 半田地区 14. 沖ノ田 15. 上黒和 16. 松田原 17. 下手

第1図 匹見中央部における弥生遺跡

も、冷涼な気候が支配的な地域に初期稻作農耕がかなりの度合いで浸透していたことを推定させる事実の判明によって從前の認識に大きな変更を求めるのであった。

そこで匹見盆地における弥生時代の実相を知るために、まずは遺跡の分布状況を追ってみることにしよう。町域でこれまでに弥生土器が出土ないし採集された遺跡は以下の如く記録されている。

- ①紙祖川筋 前田遺跡・長クロ遺跡・水田ノ上地区（早苗口・植田・水田ノ上・ド正ノ田）・木戸開中遺跡・福田ノ上遺跡
- ②匹見川筋 塚田遺跡・中曾根遺跡・江田平台遺跡・平田遺跡・筆田遺跡・ヨレ遺跡・イセ遺跡・半田地区（辰美屋・美濃殿・八祖・サイカチ）・沖ノ田遺跡・上黒和遺跡
- ③広見川筋 松田原遺跡・下手遺跡

以上の17個所の遺跡・遺跡群は、今後の調査によって同一遺跡の異なった地点として整理されることになる場合があろうし、半田遺跡群等については、複数の「単位集団」の集合体として捉えられるかもしないのである。つまり上に列記した遺跡・遺跡群については、これはごく表面的で相対的な把握に過ぎないのであるが、しかしながらお匹見盆地における弥生時代の遺跡分布の特徴的なありかたを指摘することは十分に可能としてよいであろう。

まず第1に注意されることとして、やはり遺跡の集中性もしくは密集性をあげるべきであろう。この点は先にも述べたところであるが、異なった時代の遺跡が重層するということだけではなく、同一時代においても多数の遺跡が集中する事実に注目する必要があると思う。稻作農耕とのかかわりでいえば、当然、盆地内の水利と耕地開発・維持のありかたが問題になってくる。

第2には盆地中央部に大規模で、前期から中・後期、さらに古墳時代へと継続する遺跡がみられること。そしてやや高位の地点もしくは盆地の奥部に後期を中心とする遺跡が分布するかの如き傾向が認められることに留意しなければならないであろう。このような遺跡分布の様相は、筆者が経験した南関東地方の横浜市域や島根県出雲平野の調査でも認められたことで、おそらくは弥生前期の段階で耕地化に有利な条件を備えた地点が開発され、地域の稻作の条件に応じた農業技術の創造・改良が進む中・後期の段階で新耕地の開発が周囲に及んだことの表われと解される。問題はこうした農業生産の発展の一般的傾向が、匹見盆地においては具体的にどのように展開したか、その展開過程で盆地内諸集団がいかなる成長と結合を遂げていったのかを地域状況に即して捉えていくことであろう。

4. 江田・半田遺跡群の構造

さて、盆地中央部で注目される遺跡群は、紙祖川右岸に広がる荒木地区の諸遺跡と匹見川右岸の江田・半田地区で発見された諸遺跡であろう。荒木地区の遺跡群については木戸開中遺跡の調査の際に若干の考察を試みたところであるが、1990年には水田ノ上遺跡の一角から細形銅戈a類が発見

されたことなどから判断しても荒木地区を占拠した弥生諸集団が相対的に優勢な地域的政治集団として発展しつつあったことが知られるのである。

江田・半田遺跡群については1990年度の圃場整備事業にともなう遺跡確認調査によっていくつかの重要な事実が判明し、匹見川右岸に展開するこの遺跡群の構造に関して多少の予察が可能となつたように思われる。以下その点について少しく触れることとする。

まず江田・半田地区の地形は、一見して明らかなように、この地域は北から南に向けて大きく広がる扇状地をなしている。すなわちこの扇状地は江田平台遺跡付近を扇頂にしてゆるく南東～南西方向に広がり、扇端部分は匹見川によって浸食されてゴルジュ状になっている。遺跡群は、總じてこの扇端近くに弧状に分布しているが、これは扇状地地形に特有な立地状態で、伏流水が湧水となって地表面近くに流出することが集落成立の条件をなしているのである。なお扇頂部に位置する江田平台遺跡などは背後の谷からの流水が立地の要件となっていたとみられよう。

弥生時代の集落立地の最大要件は、いうまでもなく可耕地の存在である。上記のように扇端の湧水によって湿地もしくは半湿地状態にあったと推定される個所がその候補地となるのであるが、これを江田・半田扇状地に求めるならば、現在の匹見中学校付近（西側）と益田廿日市線と波佐匹見線の分岐点付近から東側の平坦地の2箇所を取り出すことができるかと思われる。その他にも匹見川が広見川と合流して西方向に流れを変える辺りにも可耕地の存在が推定されるが、前2ヶ所に比較すれば小規模のものと考えられる。

これらの湿地・半湿地に対応する遺跡をあらためて確認すれば、匹見中学校付近（西側）では塚田遺跡、平田遺跡があり、東側平坦地と組合せられるのは半田遺跡群や反美屋遺跡等であろう。いうならば東西の2グループによって匹見川右岸盆地中央部の開発が進められたということになる。その開拓の開始期が弥生前期中葉を下らない時期に当たることは塚田遺跡や半田遺跡群イセ地点出土からの前期弥生土器出土によって知ることができるし、さらにその他の地点の調査から中・後期にも同心円的に集落の持続的拡大があったことが推定されるのである。

今後各調査地点が面的に精査されるならば匹見盆地における弥生時代の拠点的集落の発達の様相や集落構成の特徴が明確になることは間違いないとしてよいが、残念なのは西側についてはすでに学校建設等でかなり破壊が進んでいるために考古学的な発見に多くを望むことはできない。それだけに半田遺跡群に関する詳細な調査がより期待されるのである。

5. 木戸開中遺跡にみる土地利用

われわれは1987年度に荒木地区の木戸開中遺跡の範囲確認調査を行った。その際に得られた知見のうちであらためて想起されるのは、本遺跡の弥生時代以降における土地利用のありかたについてである。遺跡は紙祖川の右岸・河岸段丘上に位置している。紙祖川の流れに添って微高地が形成さ

れ、この微高地と山根の間には浅い谷地形がみられ、そこは山側から流れ出る湧水が滯水して湿地・半湿地になっていたようである。

出土上器としては縄文上器、弥生上器、土師器、須恵器等があり、これらを使用した集団の集落が微高地に営まれ、弥生時代以降にはこの湿地・半湿地が水田として利用されたことが想像されたのである。おそらく用水が必要な時は流水路を塞いで取水し、不用の際はそれを開いて紙祖川に排水するという用排水策がとられたものと思われる。このような灌漑方法は弥生時代から一貫していわゆる谷水田等でさかんに試みられたものであり、とくに大規模な土木工事を必要としない点に特色がある。匹見盆地でも弥生時代以降の集落の定着と拡大は、このような湿地・半湿地を耕地化することを通じて実現されたものと考えられよう。

盆地内を見渡すと、こうした自然の湧水によって形成される湿地帯はあちこちに散見されるし、また逆に弥生時代以降の遺跡の分布からも湿地・半湿地の存在を判定できる。そして広い範囲に湿地・半湿地の広がりが認められるのは、先の江田・半田地区であり、荒木地区であって、この地域に弥生時代以降の遺跡の大半が集中する事情もそうした可耕地との関連で理解することができるのである。

問題は、こうした湿地・半湿地を耕地とした場合その可耕範囲とか連作による地力維持の限界性がどのように克服されたかということにある。半田遺跡群のように弥生時代全期間にわたって継続した集落址が存在する以上、施肥等なんらかの対策が実施されたものと推定せざるをえないであるが、そうした集約化の様相に関する検討も今後の課題の一つとなる。

序になると、この点について少々の見通しを述べるならば、各河川がゴルジュ状をなして流れているので排水がきわめて容易となることを指摘できるであろう。したがって農閑期の耕地の陽当てによる地力の回復といったようなことは可能であったとも考えられる。問題はむしろ用水の確保といったことにあったのではないかと想像される。冷涼地の夏季の日照と降水量の相関からどのような用水対策が試みられたのか興味は尽きないのであるが、こと水田耕作に関する限り沿岸部の沖積平野に比べてより不利な条件下に置かれていたことは否めないのである。そのことからすれば匹見盆地の弥生時代の農業生産を考える場合には森林資源の獲得や河川の漁撈活動等との関連性を十分に視野に入れる必要があることを強調しておきたい。

6. 下手遺跡が提起する課題

1992年度に発見された山根地区の下手遺跡については、冒頭にこれが匹見盆地の考古学的研究に新しいページを開くものとの評価を示した。遺跡の性格に関するこれまでの見解は、墓地説、祭場説いずれとも決しがたいのであるが、どちらに落ち着くにしてもこの遺跡の発見によって盆地の弥生時代の動向を考えるうえで新たな視点が持ち込まれたことは疑いないし、水田ノ上遺跡の銅戈の

存在等ともあわせ考えると、筋繩では捉え切れない文化様相を想定せざるをえないのではなかろうか。遺跡の詳細は本章以後の報告と考察に譲るが、さしあたり以下の問題点を指摘しておくべきかと思う。

1つことは広見川筋における弥生時代の遺跡分布についてである。すでに左岸の中位の段丘上で植地地区松田原遺跡（弥生後期）等が知られていたが、全体的には弥生時代遺跡の少ない地区と見られた。しかし今回の下手遺跡の発見により、この地区にも有力な弥生時代の遺跡が存在することが明示されただけでなく、それも集落址とは異なる性格を有する遺跡であることが注目されるのである。適切な評価は今後の精密な調査にまつところが大きいが、墓地遺跡であれ、祭祀的遺跡であれ、それが盆地内のどの集落址と組合せになるかが問題となる。大規模な集落群と想定される半田遺跡群にともなうとするのも1つの見方であるが、山根地区にも相対的に自立した弥生集団が蟠居し、その墓地か祭祀場とすることも可能である。

2つ目に記すべきは、下手遺跡の構造と性格が盆地の弥生時代農耕集団の系譜を辿るうえで重要な問題を提起していると思われる点である。中村友博氏が指摘するように、その配石遺構のありかたは縄文晩期に見られるものと大差ない。しかも弥生時代のこのような遺構の存在が未だ知られていないことからすれば、下手遺跡が縄文後・晩期の伝統的な習俗のうえに成立した可能性も考慮のうちに入れておかなければならないであろう。そのこととの関連で留意すべきこととして匹見盆地では、木遺跡でもそうであるが、縄文晩期と弥生前期の遺跡の重複するケースがひじょうに多いという事実がある。この事実を基に盆地内でどのような集団が稲作農業を採用したのかといった問題にまで立ち入って考察するには、なお検討すべきことが多いあるが、解明が急がれる課題ではある。下手遺跡の諸事実がそのことを求めているように思われる。

（田中 義昭）

参考文献

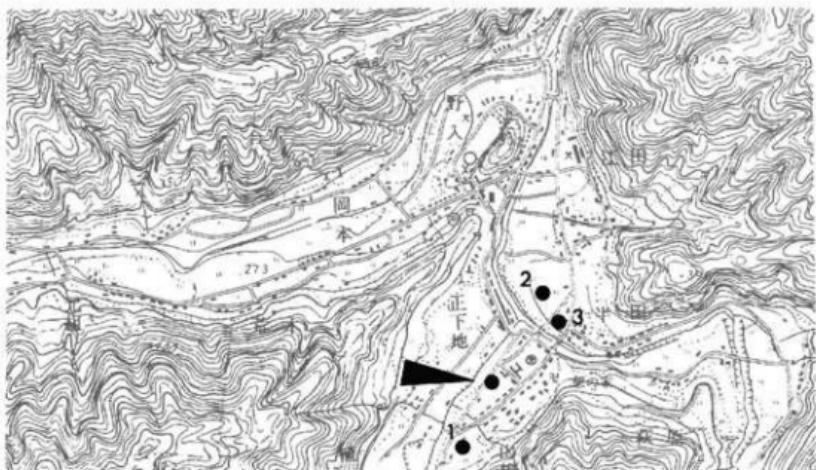
- 島根県匹見町教育委員会 1988年～1991年『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅰ～Ⅳ。
島根県匹見町教育委員会 1987年『新柳原遺跡発掘調査報告書』。
島根県匹見町教育委員会 1990年『石ヶ坪遺跡』。
島根県匹見町教育委員会 1991年『水田ノ上A遺跡・長クロ遺跡・下正ノ田遺跡』。
田中義昭 1976年「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』65。
田中義昭 1983年「南関東における初期農耕集落の展開過程」『島根大学法文学部紀要文学科編』5－I。
田中義昭・西尾克己 1988年「出雲平野における原始・古代集落の分布について」
『山陰地域研究（伝統文化編）』4。
松本岩雄 1992年「石見地域『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』」。
中村友博 1992年「水田ノ上遺跡B地点採集の縄文土器」『島根考古学会誌』第9集。
中村友博 1992年3月3日『匹見町の配心遺跡』山陰中央新報（朝刊）。

第2章 はじめに

第1節 位置と環境

本報告する下手遺跡（A・B両地点を総称して）は、島根県美濃郡匹見町大字匹見イ713番地ほかに所在する。

本地区は、北流する広見川から比高差約10m測る右岸にあって、その狭長な広見川に沿う河岸段丘面には水田部や民家が点在している。また隣接地には焰硝田遺跡・河原遺跡などの縄文遺跡があり、山裾には和田古墳や永長山古墳が存在し、広見川を200m下る匹見川との相会する対岸にもヨレ遺跡・イセ遺跡などの著名な遺跡が分布している（第2図・第3図・図版1-1）。

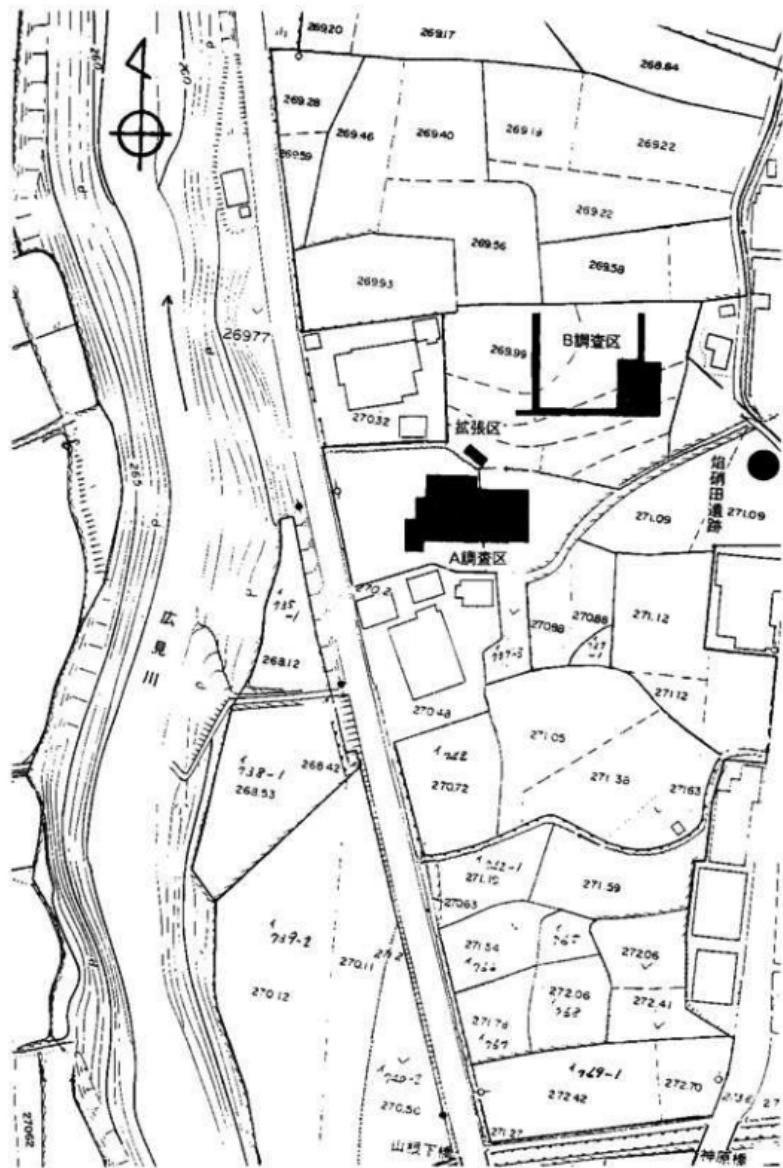


第2図 遺跡位置図

第2節 調査に至る経緯

今回の調査は、本地区の県営圃場整備事業に伴って、平成4年度に行った本格調査である。

該当地を選定したのは、隣接地に周知の遺跡である焰硝田遺跡が存在しているため、まず平成3



第3図 遺跡配置図

年度に国庫補助事業として、その拡がりを把握するため、分布調査を行なって明らかになったものである。¹¹ その分布調査は、2 m の方形区を該遺跡の北西面に 6 鑿所を設けて実施した。

その結果、特に西面の A・B 区とした調査区（今回の A 調査区）では、上層面を中心陶磁器類、また下層面には弥生土器とともに、ピットなどの遺構が検出された。また下流方向の北西面の D・E 調査区では若干の縄文遺物が出七し、その拡がりが明らかになったものである。

第3節 調査の経過

分布調査を踏え、平成 4 年度に実施した本格調査は、弥生土器やピットなどの遺構が検出された焰硝遺跡から 30 m 測った西方向の地点を A 調査区として設定した。また北東面で若干の縄文遺物が出土した地点では、その分布密基地が山麓側と判断し、焰硝遺跡の北面側に B 調査区と称名する調査地区を設定した（第 3 図）。

現地調査は、平成 4 年 4 月 13 日から同年 7 月 29 日までのうち 70 日間、561.5 人役を費やして行なったが、全てについては完掘せず調査区は盛七工法によって保存処置を構じて完了した。

（渡辺友千代）

註

- (1) 匹見町教育委員会『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 V』 平成 4 年 3 月

第3章 A調査区の概要

第1節 調査区の設定

調査対象地とした現地表面標高は、凡そ270.1～270.3mあって、その高低差約20cmを測る水田地である。そのうちA調査区とした地点は広見川の段丘端に当り、B調査区に比べてやや上流寄りで、レベルは高部を示す。またB調査区は、広見川から約80m山裾（東）方向側に位置するもので、20cmばかり低いレベルである（第3図）。

調査区設定は、A調査区とする対象地点の南東面に、まず基点杭とするものを任意に設けることから始めた。該地点は磁北方向を民家によって阻まれているために狭く、したがってその方向を10mとし、一方東西方向に向かっては20mを測る長方形の調査区を設定した。200m²の大区画を設定した後、中央部に十文字方向に幅50cmのセクションベルトを設けた。その地区割した各区画に、基点とした南東から右廻り方向にA～Dの順に小区画名を付称することにした。ただし、掘削調査の段階で、遺構の性格をより浮彫りにするために一部拡張したことによって、最終的には248m²の調査面積となった（第13図）。

第2節 層位

1. 基本層序

A調査における基本層序は、1層の水田耕作土、2層の客土、3層の茶褐色土、4層の黒褐色土、5層の黄灰砂質土の層序である（第4図）。

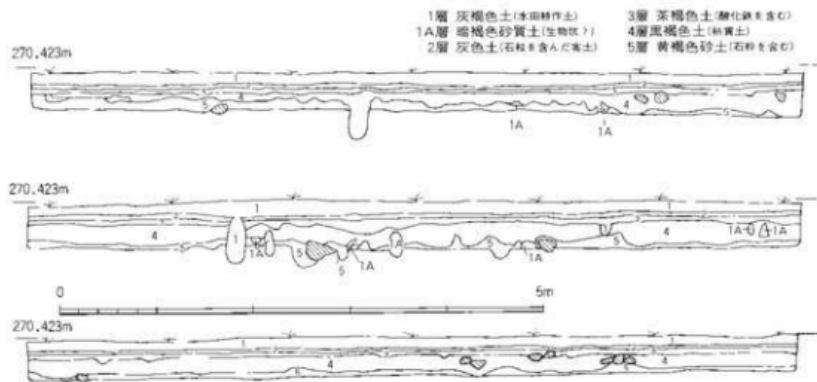
2. 層序状況と出土遺物

1層の水田耕作土は、9～17cmを測り、層厚に深浅差がみられる。採集物としては陶磁器類のはか、若干の石器剝片などが出土した。

客土である2層は、層厚3～7cmを測り、5mm大の石粒を含む灰色土である。出土物としては陶磁器類などが出土した。

3層は、酸化鉄分が沈在した乾燥ぎみの茶褐色土。層厚は4～9cmを測り、下部への深浅差がはげしく、土質的には下層の4層に類似性がみられる。遺物としては陶磁器類のはか、若干の石器剝片や土師質土器・鉄滓などが出土した。

4層は、有機質性の黒褐色土。層厚は凡そ15～30cmを測るが、部分的には尖滅あるいは薄層もみ

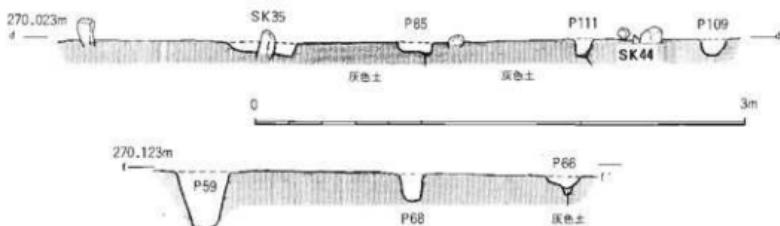


第4図 土層図(A調査区)

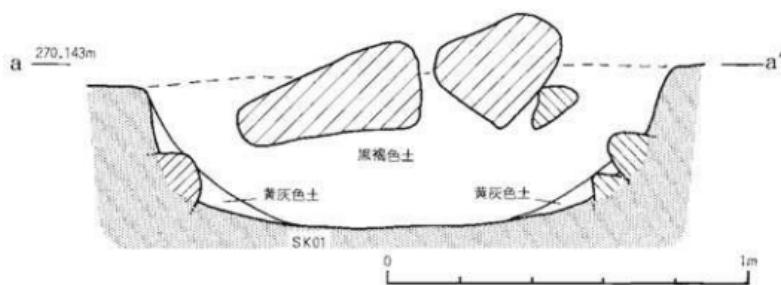
られ、下面の層界は乱曲する。また土質はやや粘質性および、層中には遺構に伴うと想定される15~30cm余りの円碟(河原石)が検出されている。遺物は、下層面を中心に弥生土器を伴い、また上層面には若干の縄文土器や陶磁器が出土し、搅乱的出土を呈していた。これは、土層図(第4図)でも明かなように嵌入する多くの生物坑(A1層)、あるいは同一層内における遺構を捉らえることができなかつたと思われるが、それらへの陥入遺物とみることができよう。しかも上層面には縄文遺物が比較的多く出土していることから、その多くは削平などによる混入物と考えられる。

5層は、黄褐色砂土で、若干の砂礫を含む。本層からは上位層の下面から陥入したと想定される縄文遺物・遺構が西半の北端のきわめて狭偏から一部検出されている。

第3節 遺構



第5図 遺構断面図1



第6図 遺構断面図2 (SK01)

1.はじめに

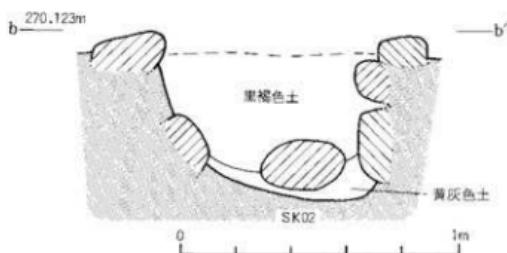
遺構は、4層黒褐色土と5層黄褐色砂土の層界で確認された(図版2-2)。しかし3層茶褐色上から4層上面にかけて多くの陶磁器類、また土師質土器・鐵滓などが共伴していることからみて、同層面で見逃していると思われるが、遺構が存在した可能性が強い。それらの陥入遺構と想定されるものは、4層・5層の層界に確認されており、とくにピットなどの集中する遺構は層厚の薄い東半の南面に顕著に表出している。また僅少であるが、土師器・須恵器も出土しているため、該当期の遺構も相伴している可能性もある。それらの時期的異なる遺構を埋土・共伴遺物等の両面から識別することに務めたが、それには一定の限界があった。したがって、図示した殆どの遺構図は4層・5層の層界に表出したものを基

本にしたものであって、同時期のものではない、ということを始めに断っておきたい。

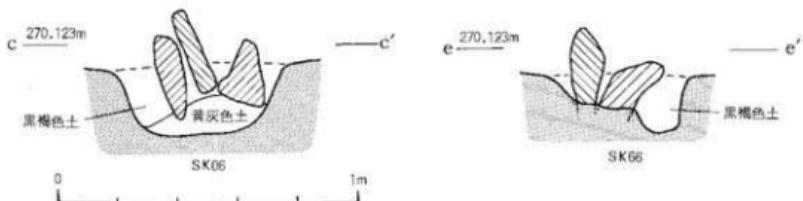
また遺構については、凡そ柱穴状を呈し径30cm以下のものをP(柱穴)とし、それ以上のものは坑形状、あるいは配石の有無に拘らず、全てSKという略号で統一している(第13図)。

2.各遺構の概要

柱穴(P) 柱穴と想定されるものは、約200穴(略号で図示していないものも含めて)検出さ



第7図 遺構断面図3 (SK02)



第8図 造構断面図4 (SK06・SK66)

れていて（第13図）、凡そ径35cm以下を対象し、それらは埋土・共伴性からみてⅢ時期に大別できるものと考えられる。

まず近世期以降とするⅠ期のものは、1・2層の灰色～灰褐色土が陥入する柱穴群である。これらの柱穴は、径15cm以下のものが多く、稲架跡の可能性が強いものと考えられる。

また、埋土が茶褐色（酸化鉄が沈在する）を呈するⅡ期とするものは、土質はやや固く、ブロック状に黒褐色土が陥入する柱穴群である。これらの柱穴群は、径30cm前後と大きめなものが多く、16世紀に位置付けられる青磁を共伴したP57などからみて、中世以降の遺構と想定できるものであろう。

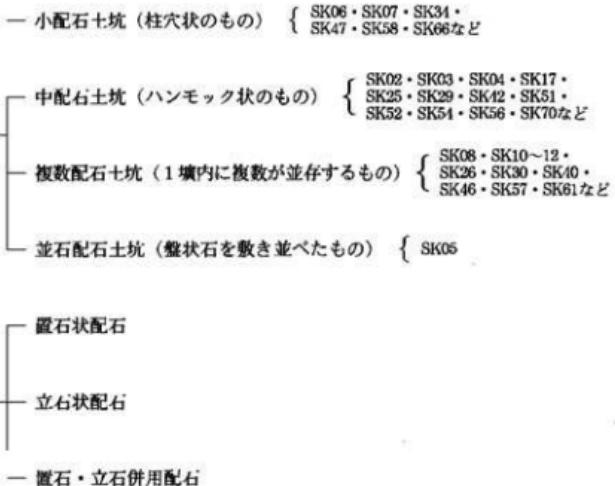
弥生時代と捉えられるⅢ期とするものは、混色のない黒褐色（4層）の埋土と想定される柱穴群で、明確なものとしてP03・P52・P59・P64・P68などが検出されている（第5図・第13図）。埋土の色調を主体として捉えられているために見送っているものもあるようと思われるが、お凡そ該期における本遺構は、遺跡の性格上から僅少であると考えられる。ただしSB01・SB02と略号する柱穴群箇所（第13図）は、周辺する柱列形態からみるならば、該期の可能性も考えられないでもないが、詳細については判なかった。以上、Ⅲ期に大別したが、出土遺物から捉えるならば、より細分が必要であるものと考えられるものの、埋土・共伴性からは限界があった。しかも柱列などの形態においては、詳細に検討していないので不充分であることは言うまでもない。

土坑 (SK) 土坑とするものは坑径を対象とはせず、凡そ径約35cm以上の計測面から捉えている。したがって中には機能上、柱穴とみなすべきものも含んでいる可能性もあると思われる。また、これらの土坑とするものは72坑が検出されているが、そのうちSK10・SK11・SK12・SK16・SK32・SK38・SK44・SK55・SK58・SK62の10坑については完堀していない。そのほか頗著な焼土が満溝する2坑については、焼土I・IIというように別称することにした（第13図）。

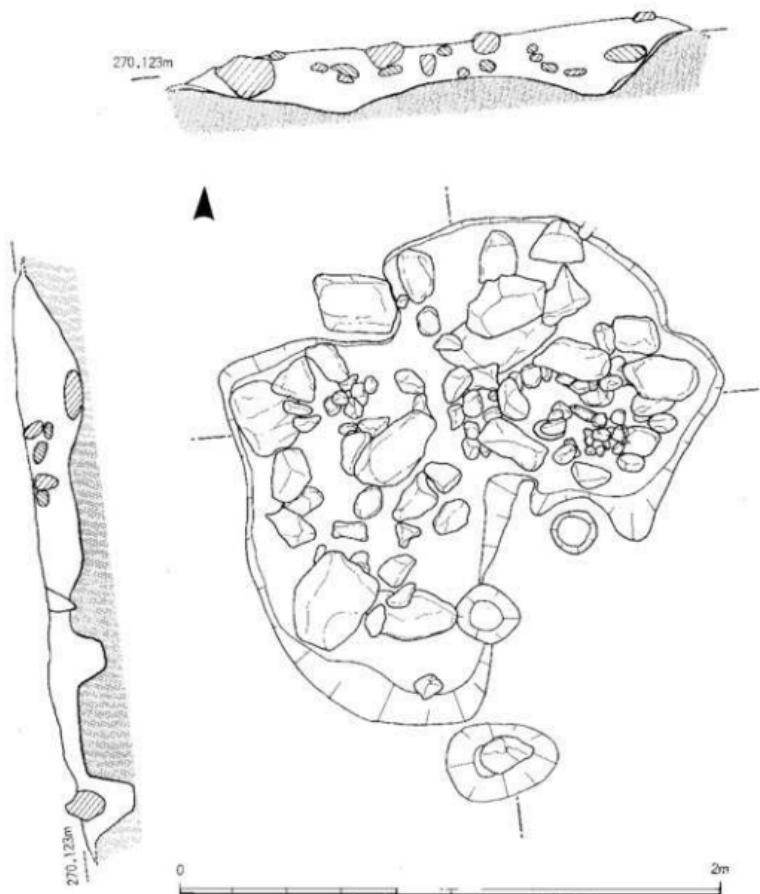
本土坑については縄文・弥生・中世以降のⅢ期に区分することができる。そのうち中世以降と想定されるものは、黒褐色土中に3層の茶褐色土（酸化鉄）が沈在するSK21～SK24・SK41・SK45・

SK60・SK67・SK72などが明かに相当するものと考えられる。そのうち特に南西面のSK21～SK24には羽口が共存している（第14図・第20図・図版9-2）。これらの土坑が中世以降のものと捉らえられるのは、相似状況のP57から16世紀の青磁（第13図・第14図・第19図・図版10-1）が共存していること、他にも該期に位置付けられる雷鉢などの磁器（第19図・図版10-1）などの出土から想定できるものと考えられるからである。しかし断片的遺構の検出であって、具体的な形態については掴むことができなかった。

Ⅱ期とするものは、一連の弥生時代の土坑群（第1表）であり、坑内には4層の黒褐色土が陥入しているものである。これらの七坑群には10～40cm大の河原石を用いた配石を伴うものと、そうではない2つのタイプに大別することができ、前者はさらにその形態から以下のように細分することができるものと思われる。



これらの土坑に伴う配石は種類的、あるいは密集的などの違いがみられる一方、立石を伴うものなどがあり（第5図・第8図・13図・図版4-1），その大半は坑上に配置されている。また、一部の柱穴状土坑型とみられるものには、側坑部に積み石状の組石を設け（第6図・第7図）ているものもあり、複数配石土坑型としたSK08（第9図）には、坑底部に意識的と想定される放射状の組石が確認された（写真1）。このうち複数配石土坑型と分類した前述のSK08、またSK26・SK46などには、同一坑内に数基の配石のまとまりが確認されるとともに、その下坑部には個別の“陥ち



第9図 SK08 実測図

込み”が存在した。このような同坑内に複数の併置された配石は、重複と考えられるが、埋土の堆積状況や切り合い関係からは確認することができなかった。むしろその様相からは同時における一括的構築がなされたのではないか、とも考えられる。

土坑形は円形もしくは梢円形が大半で、重複と考えられるものには不整形もみられた。また、径



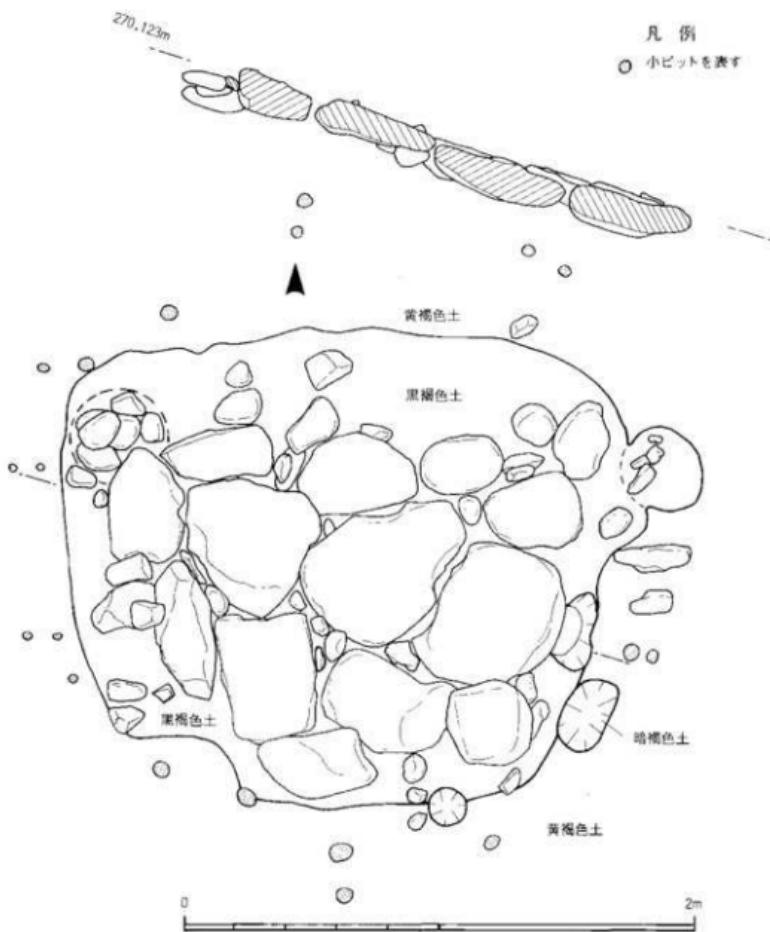
写真1 SK08の坑底面における放射状配置状況

が凡そ40cm以下の柱穴状土坑型と分類したものは、側壁はやや垂直傾向を呈すが、径が大きくなっていくにつれて、そのカーブは弛緩である。坑内には4層の黒褐色が陥入し、坑底面などの遺構界には黒褐色土と5層の黄褐色土とが混ったと思われる黄灰色土が確認された（第16図・第7図・第8図）。

土器片を中心とした出土遺物を平面的分布状況からみると、上坑範囲内に集中（第14図）しており、また垂直的分布からは土坑上に多く出土する、といった傾向がみられた。これらの土器片は細片が多いものの、特にSK10～12に伴ったものは破片も大きく、その出土状況からは獻供を想起させる様相を呈していた（図版2-1）。しかしこれらの遺構からは、墓坑であるといった証拠の骨片・骨粉類は一切検出されていない。

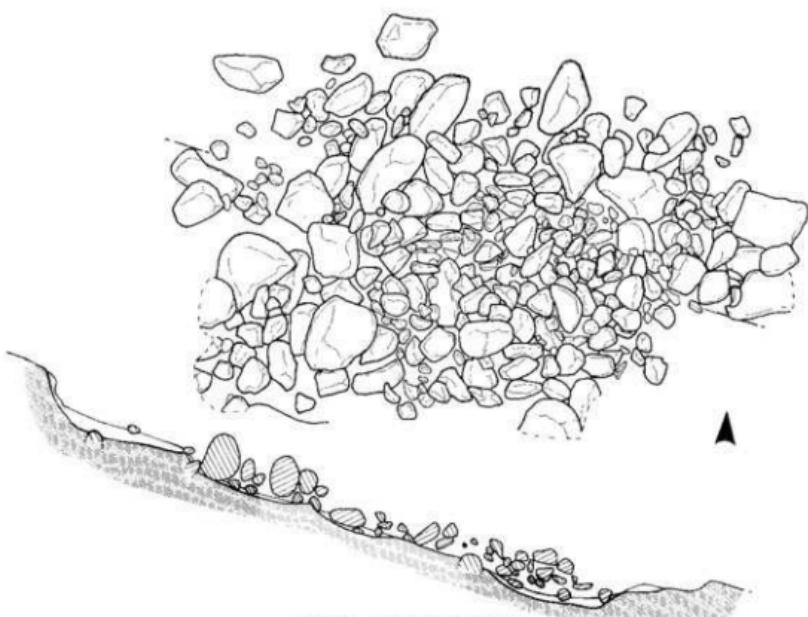
並石配石土坑としたSK05は、調査区の西面の南西寄りに検出された（第13図・第14図・図版6）敷石状の遺構である（第10図）。並石状に敷かれた石体は、平状の河原石が用いられ、大きいものは長さ約70cm、幅約50cm、小さいものでも20～30cmを測る。平坦に並べられたこれらの石体は、上面側を平坦に並べ、その石体との隙間には5～15cmの円礫（河原石）を詰め、東一西方向約1.8m、

A調査区構造計測表



第10図 SK05 実測図 1

北—南方向約1.3m測ってほぼ長方形を呈する（第10図）。これらの並石遺構をとり囲む土坑の検出標高は約270.07mを測り、その径約1.9m×2.1m測って隅丸長方形状を呈して1周り大きく、黒褐色土が陥入し、その地山の黄褐色土との境界は明瞭であった（図版5-2）。また並石の上面標



第11図 SK05 実測図 2

高は約270.123～270.13m測って、土坑の検出面標高との差約6cm以上あることから、これらの遺構は4層黒褐色土の下層から5層黄褐色土層にかけて構築されたことが判る（第12図）。

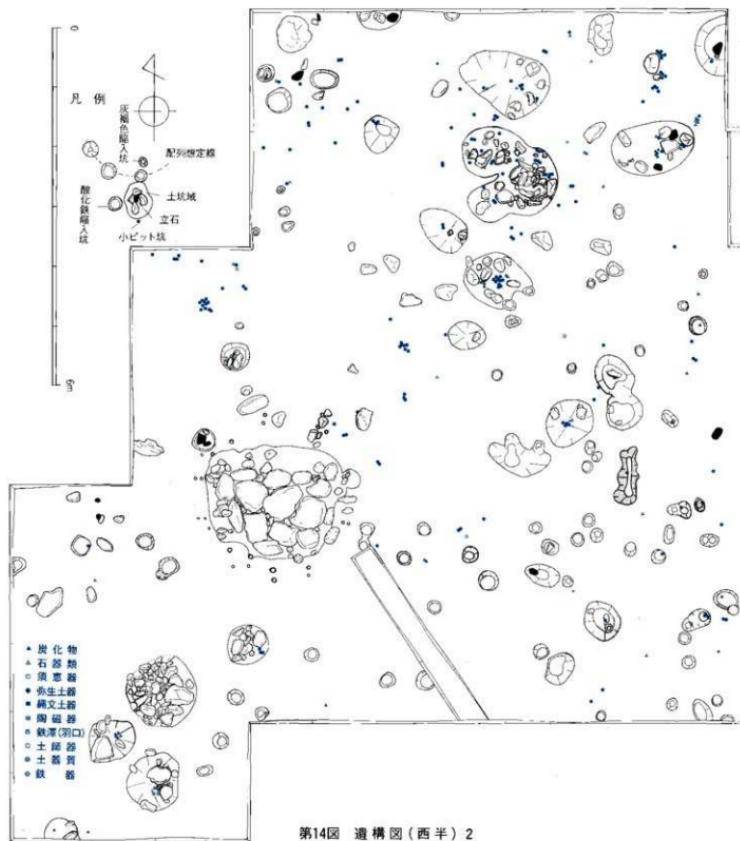
並石された石体は厚さ13～18cmを測り、天面を平坦にしているため、下端面は凹凸する。その下層面には天面の並石された配石範囲にはほぼ一致して、5～30cm大の礫が重層して乱置されていて、その深さ15～25cmを測る（第11図）。しかし並石の下端面と礫の上面との間には拳大的隙間がみら



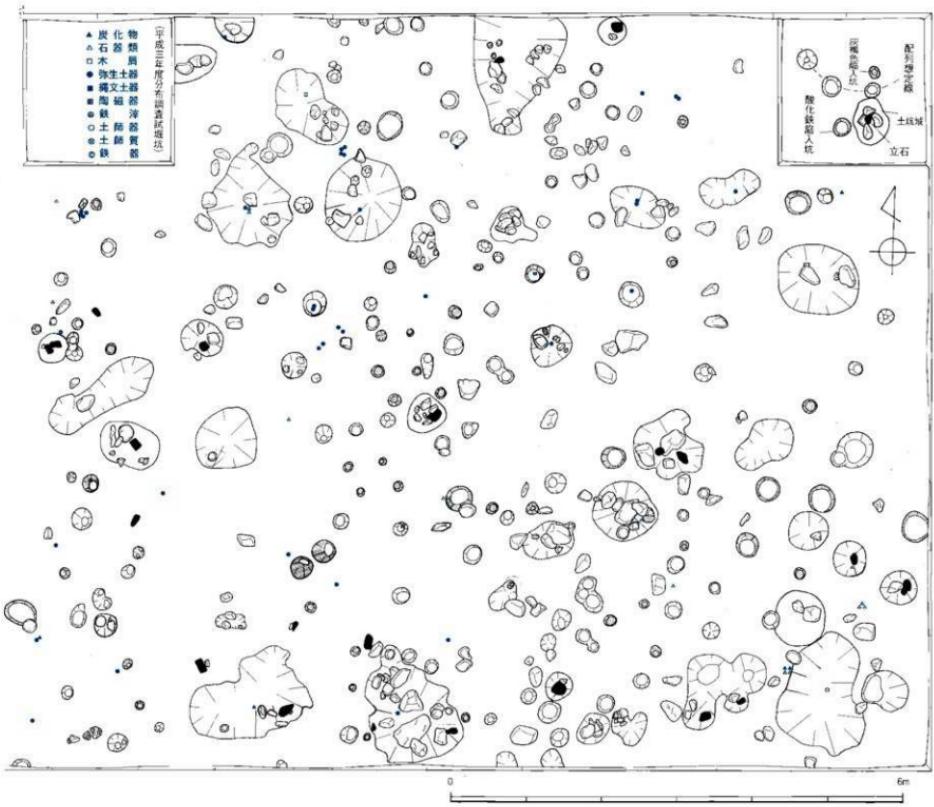
第12図 SK05 断面図



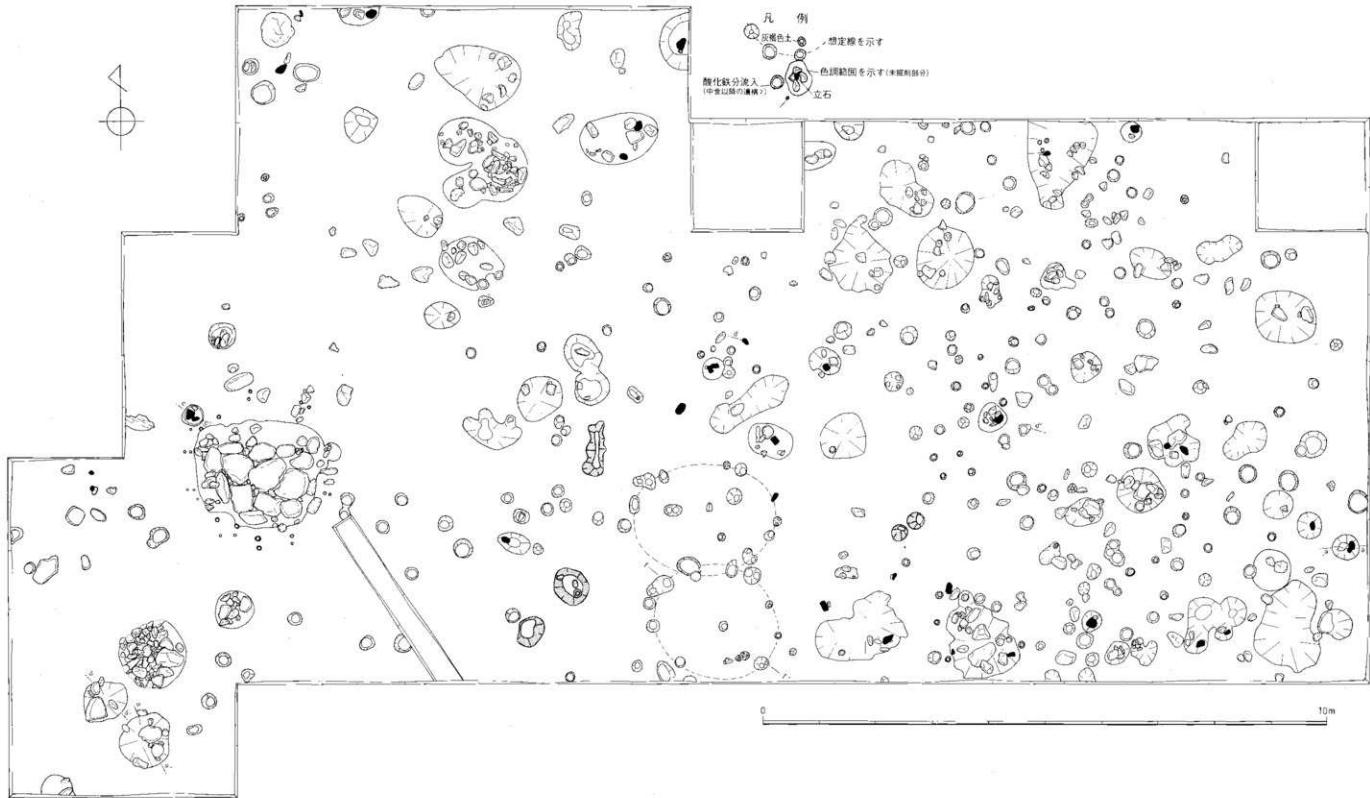
第13図 遺構図 1



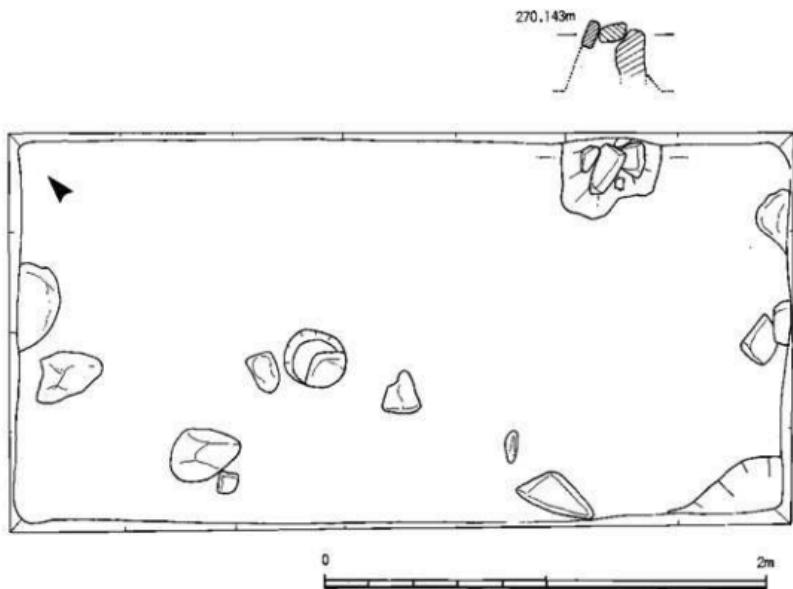
第14図 遺構図(西半)2



第15図 遺構図(東半)3



第16図 遺構図 4



第17図 拡張区平面図

れ、黒褐色土が陥入する（第11図・第12図・図版6-6）。おそらくこれらの陥入する黒褐色土（黄褐色土がブロック状に点在）は、並石の隙間から流入したものと思われ、その土中には2~4cmの弥生上器片が数片検出されたが、並石上にはまったく遺物は確認されていない。陥入するこの黒褐色土は疊の隙間から坑底面まで達しており、5層との層界面は黄灰色を呈する。また乱置状を呈した疊は、河原石（円礫）が大半であるものの、数個には人為的角疊が確認され、その中に焼石らしきものも確認されている。一方、これらの疊の中には30cmの大の石体が数個確認され、それらは立石状に構築され、天面の並石を支えた機能をもつものであったものであろう（第11図・第12図・図版6-8）。

この並石配石遺構には、少なくとも2基の重複した配石がみられる（第10図）が、埋土が同一であるために切り合い関係などから新旧は明らかにすることができます、また同坑内（並石配石遺構）に介在する3基の柱穴は、その色調が暗褐色を呈していることから後世のものと思われ、したがって両者とも本遺構とは別のものとして捉えられる。ただし、周囲する涙痕状の小ピット群は、注

意されるものであろう（第10図）。頭初、これらの径4～10cm測るビット群は、周辺の検出面でも認められていた生物痕と理解していたが、埋上が黒褐色を呈していること（生物痕は灰褐色～暗褐色を呈する）、またその痕跡が2坑の列対をもって、規則的に遺構を外周していることから本遺構に関連する、ものと理解される。しかし堀削などの精査していないこともあって、それらの小ビット群がどのように関与していたかについては不明である。

Ⅱ期とするものは、埋土の黒褐色土中に黄褐色土の地山土が混入する遺構である。本遺構はSK15およびSK39のみ2坑であるが、いずれも調査区の北端に偏在して確認された。このうちSK39では縄文土器が共伴しており、該期の遺構の存在性が裏付けられるが、他の縄文遺物については後世の人為層である1・2層に出土しているものが多く、該坑に伴うものとはいえない。50mの東側には焰硝田遺跡が存在することから、その多半はおそらく水田開墾による削平等によって混入し、般入したものとみられる。しかし調査区の北側に設定した拡張区（第17図）の5層上面には、縄文晩期に比定されるものが数片検出されており、当該方向に存在している可能性も考えられる。

建物址（SB01・SB02） 建物址としたSB01・SB02は、調査区のほぼ中央の南面に検出された遺構である。そのうち前者は短径2m、長径2.4m測って梢円を呈し、Ⅱ期とする柱穴が7穴周円して、中央部にP68の1穴がみられる（第13図）。また後者は短径2m、長径2.6m測って梢円を呈し、Ⅱ期とする柱穴が8穴周円する。两者とも竪穴土坑などの遺構は認められず、また柱列上には後世の柱穴も介在していることなどから、該期の遺構であるとは断定できない。

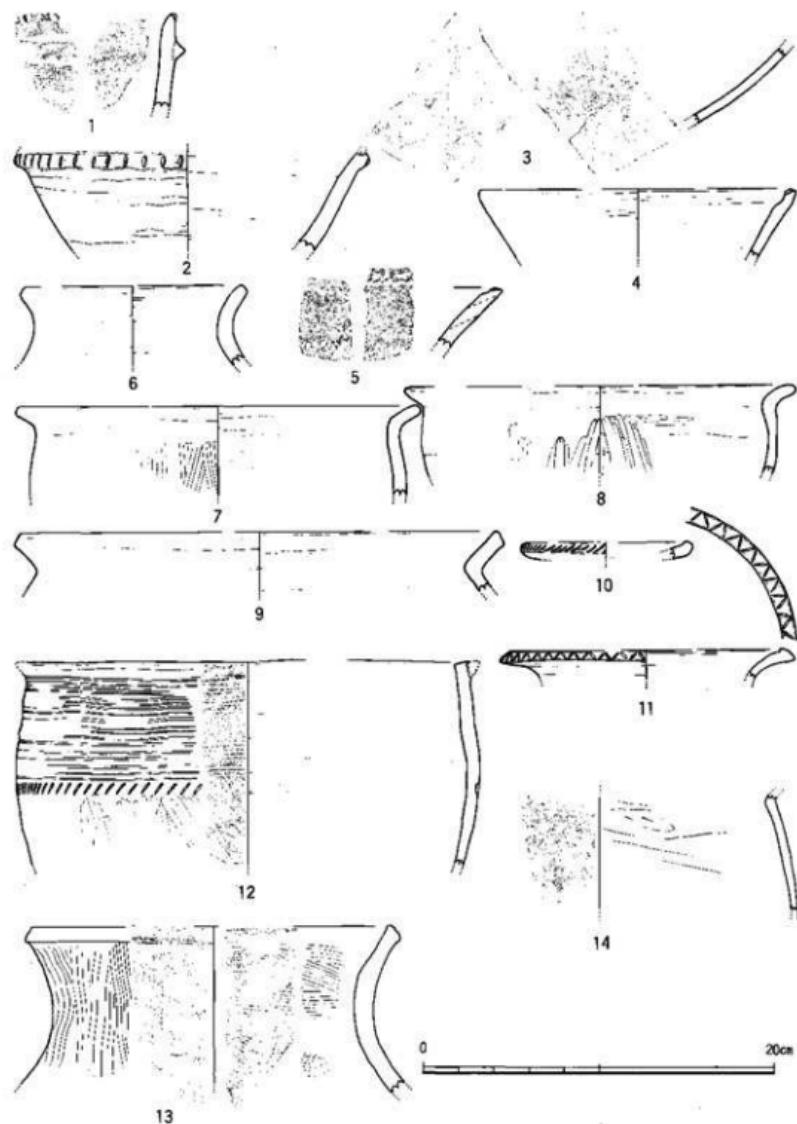
第4節 出土遺物

1. はじめに

本遺跡からはコンテナー箱にして4箱のものが出土した。その比率は凡そ、弥生上器片40%、陶器類20%、剝片を含めた石器類15%、鉄洋類（羽口を含めて）10%、縄文土器片7%，その他（須恵器、土師器、炭化物、磁器など）8%であった。これらのうち、実測は時期のキャラクタリストイク性の富んだものを中心とし、特に縄文土器は出土比率以上に採用した。

2. 実測遺物

縄文土器（第18図・図版8-1） 1～5は、調査区の北面および拡張区に出土した縄文土器類。そのうち1は、直向ぎみに立ち上がり、口縁端はやや外反するもの。口縁部外面には三角形の突帯を有し、その頂部、また口唇部にヘラ状工具による浅い刻みを施す。突帯部下の外面は縱方向のハケメ調整の後、横位のハケメを施し、その部上及び内面はナデ。内外面とも黄褐色を呈し、胎土は2mm大の石英を含む。2は、拡張区の4層黒褐色下面に出土した突帯文土器で、突帯下半は強



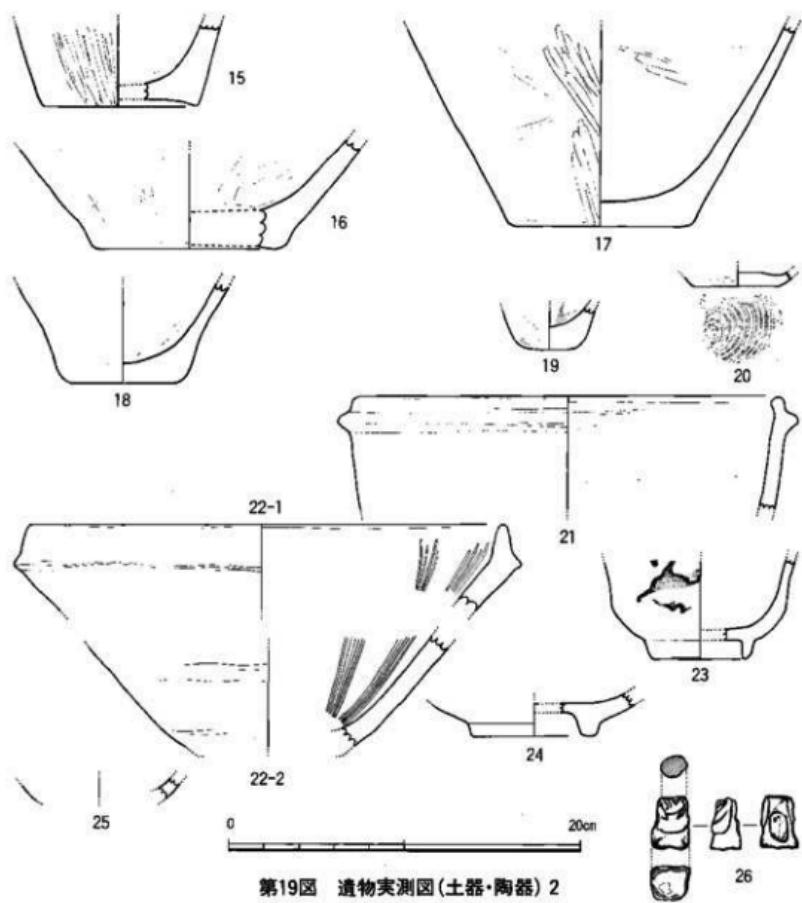
第18図 遺物実測図(土器)1

く開くが、その部上は垂直ぎみであることが欠損しているものの、看取ることのできる口縁部。内外面ともナデで、外面は暗褐色、内面茶褐色を呈する。3は、精製の胸部。内外面とも精緻に磨き、外面は茶褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土は密で、焼成はきわめて堅緻である。4・5は、調査区の北面の4層に出土した浅鉢系の口縁部。両者とも強く外傾し、口縁端部の内面側に抉り状の凹線・沈線を施し、その区画の端部面を刺突で刻む。いずれも内外面を板状工具で調整の後、ナデとする。前者は黄褐色、後者は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでやや粗い。

弥生土器・土師器（第18図・図版8-2～9-1） 6～14は弥生土器の口縁部。そのうち6は、ゆるく外反する壺状の口縁部。器肉はやや厚く、口縁端部はやや角ばる。内外面ともナデを施し、黄褐色を呈する。7・8は、強く屈折して口縁部が外方する甕。そのうち前者は、頸部下半をハケメ調整、口縁部をヨコナデとし、内面は口縁部をヨコナデ、頸部下半をハケメ調整の後ナデとする。後者は、外面頸部下半を縱方向のヘラミガキし、口縁部はヨコナデとし、内面はナデである。両者とも堅緻な焼成で、灰褐～暗褐色を呈する。9はSK17の土坑内に出土した「く」の字状に屈折する口縁部。口縁端部はやや角ばり、調整は内外面ともヨコナデである。色調は暗褐色で、胎土は緻密。10・11は、広口壺の口端部。両者とも端部は上方に小さな拡張部をもち、その端面に前者は「ノ」の字、後者は「ハ」の字状の刺突文を有する。いずれも淡黄色で、調整はヨコナデである。12は、倒鐘状の体部をもつ甕。器面全体をハケメ調整した後、口縁端部外面に逆「L」字状の張り部を設け、その部下を7本単位のクシガキ直線文を3回施文する。直下の胸部にはヘラ工具による「ノ」の字状の刺突文を施し、下方は斜め方向のヘラミガキで調整。内面はナデで、色調は黄褐色、外面には煤が付着する。13は、SK08の配石に出土した壺の口縁部（図版2-1）。ゆるく外反して立ち上がり、その端部はやや角ばって外向する。器肉は厚く、内外面ともハケメ調整とし、端部はヨコナデである。14は薄手の甕。外面はハケメ、内面はナデ調整で、焼成はきわめて堅緻である。

15～20は底部。そのうち15～18は弥生土器、19・20は土師器の底部。15は、凸レンズ状を成した上げ底で、外面は丁寧にヘラミガキし内面はナデ調整としたもの。胎土には2mm大の石英の砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。16は、底部外面にふくらみをもった平底。調整は外面をヘラミガキ、内面をナデとしたもの。17は、外面をヘラミガキ、内面をヘラ調整した後にナデとした平底。色調は灰褐～黄褐色を呈する。19は、丸底おびた土師器。外面はナデ、内面は棒状具による調整とし、焼成はきわめて堅緻で、瓦器質土器かも知れない。色調は茶褐～赤褐色を呈する。20は、焼土Ⅱとした土坑から炭化物とともに出土した土師器。底部外面には顯著な糸切り痕がみられ、内面はナデとしたもの。胎土は緻密で、色調は橙褐色を呈する。

瓦器質土器・陶磁器類（第19図・図版9-2～10-1） 21は、SK01の坑上に出土した瓦器質の羽釜。体部は外傾して立ち上がり、端部は短く内折する。口縁部外面に厚さ7mmを測る鶴を有し、



第19図 遺物実測図(土器・陶器) 2

外面はケズリ、口縁端部及び内面はハケメ調整。色調は暗灰褐色を呈し、外面には顯著な煤が付着して黒褐色である。おそらく15世紀ごろのものであろう。

22~26は陶磁器類。そのうち21-1・21-2は、客土から出土した備前焼の雷鉢。外面は茶褐色、内面は白灰~灰褐色を呈する。器形からみて、おそらく室町前半ごろのものと思われる。23は磁器で、外面に呂須の染付けがみられ、釉が冰裂する。江戸後期の碗であろう。24は陶器で、片口の底部。おそらく江戸末期の在地産のものであろう。25は、P57の遺構内に出土した室町期の青磁。釉

は厚く、灰青色を呈する。26は、3層に出土した陶器製の座像。推定座高約4.5cm測り、頭部は欠損するが、仏像と思われるもの。

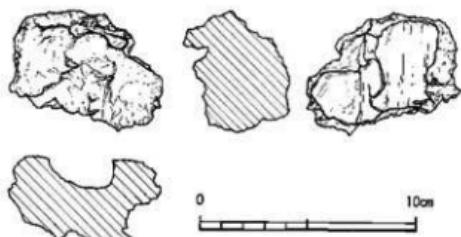
羽口（第20図・図版9-2）

SK24土坑内に出土した羽口。外面に溶鉄が付着して凹凸し、黒褐色を呈する。内面は灰褐～暗褐色を呈し、筋状の型取り痕がみられ、

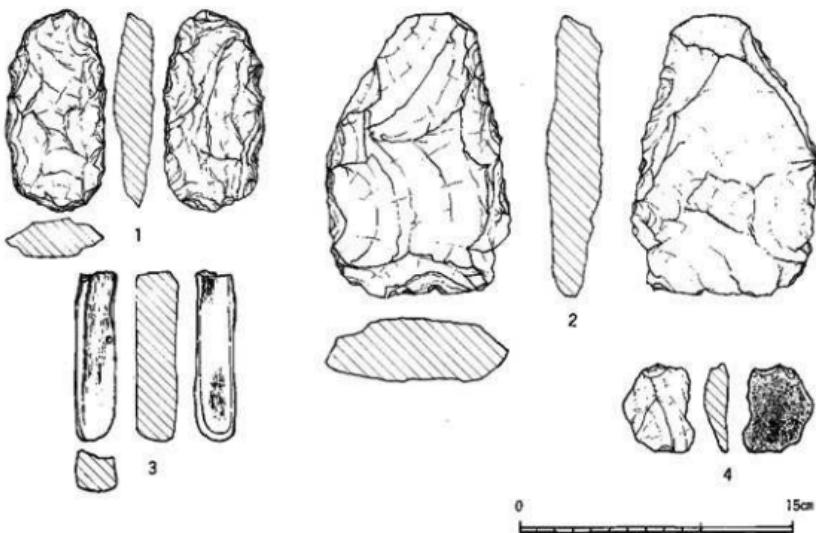
推定内径は約3cm余り。また他に鉄滓も數点出土している（図版9-2）。

石器類（第21図・図版10-2） 石器類については剥片は多かったものの、製品としての石器はきわめて少く、しかも人為層である1・2層で多くを採集した。

1・2は、凝灰岩質の打製石斧。前者は器高11cm、器幅5.5cm、器厚2.2cmを測る小判形のもの。また後者は器高15.5cmを測る大型の楔形のもので、粗く成形した後、周辺部を2次的に整形する。



第20図 遺物実測図(羽口)



第21図 遺物実測図(石器) 4

3は、3層に出土した棒状形をした凝灰岩質の砥石。側面は自然面であるものの、両面の特に背面は擦り磨かれ凹む。その凹みには線状の筋が顯著。4は、安山岩質の石器剝片で、裏面は自然面、背面には細部調整はみられる。

(渡辺友千代)

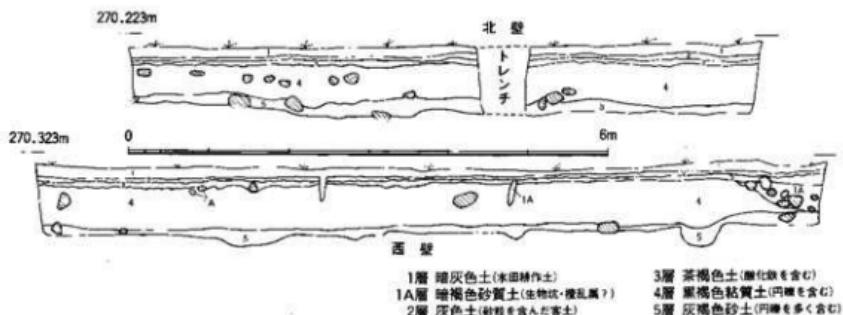
第4章 B調査区の概要

第1節 調査区の設定

現地表面標高約270.1m測るB調査区は、A調査区の北東約30m地点にあり、下流（広見川）方向に当っているため、A調査区の地点より約20cmばかり低いが、やや据寄りということもあってその差は少ない。

本地点は平成3年度の分布調査において、遺跡であることは把握されていたが、しかし出土遺物も少くその性格については明らかではなかった。そのため調査対象地とした地域に、まずトレンチを設定して遺物の密度の高い部分を探ることから始めた。そのトレンチ幅は60cmのものとし、調査対象地の南面にまず任意に、東一西方向へ17m測るものを設け、その東端には磁北方向に向って20m測るものも設けた。さらに西方は、東端から15m測る地点から磁北方向に20m延ばした地点を設定した（第3図）。掘削の結果、南東側の4層で土師器、5層において弥生土器などの比較的密度の高い比率で検出されたので、該地点に調査区を設定することにした。

調査区は、トレンチの南西端に当る調査杭を基点とし、磁北方向に10m、東一西方向には基点を中心にして東へ3m、西へは5m測ってトレンチをとり込む形で設定。つまり10m×8mの長方形区を設定したのである。また調査区のはば中央を磁北に向って走るトレンチの西面に沿って、土層観察のための幅50cmの中央ベルトと称するものを設定した（第25図・図版13-1）。



第22図 土層図(B調査区)

第2節 層 位

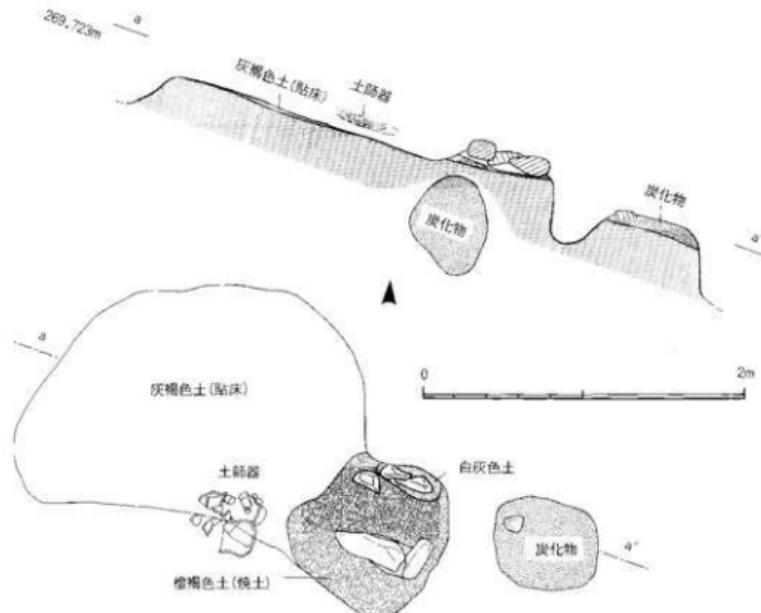
本調査区の基本的層序は、1層の水田耕作土（暗灰色土）、2層の客土（灰色土）、3層の茶褐色土、4層の黒褐色粘質土、5層の灰褐色砂質土である（第22図）。

1層の耕作土は層厚10~16cmを測り、低位面である北面に向ってやや厚くなっている。

2層の客土は3~6cmを測り、1層とは違って逆に南東側が確かに厚い。色調は灰色を呈し、石粒・砂粒を含む。出土遺物としては陶器類や土師器、若干の石器剝片などが検出された。

3層は、酸化鉄が沈在する茶褐色土。層厚は3~12cmを測り、下面是乱曲する。層状は下位層の4層に類似するが、やや乾燥ぎみで、若干の土師器が出土している。

4層は層厚40~50cmを測る黒褐色土である。やや粘質性で有機質土と思われる。層中には10~30cm大の円碟を含むが、これらの円碟は、層状から判断して遺構に伴うものと思われる。本層の上層面には土師器などの遺物とともに、該期の遺構が検出された（第23図・図版12-1）。



第23図 住居址遺構図

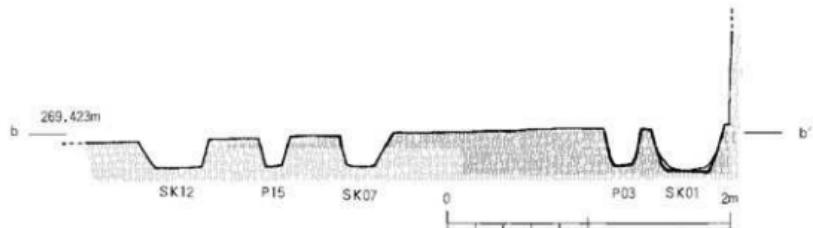
また、下面から5層にかけては、弥生土器及びその遺構を伴った。

5層は、円礪を多く伴う灰褐色砂質土である。本層には、4層から介入する弥生遺構が確認されているとともに（第24図・図版13-1），また南東面を中心に縄文期の遺物・遺構を伴った。

第3節 遺構

1.はじめに

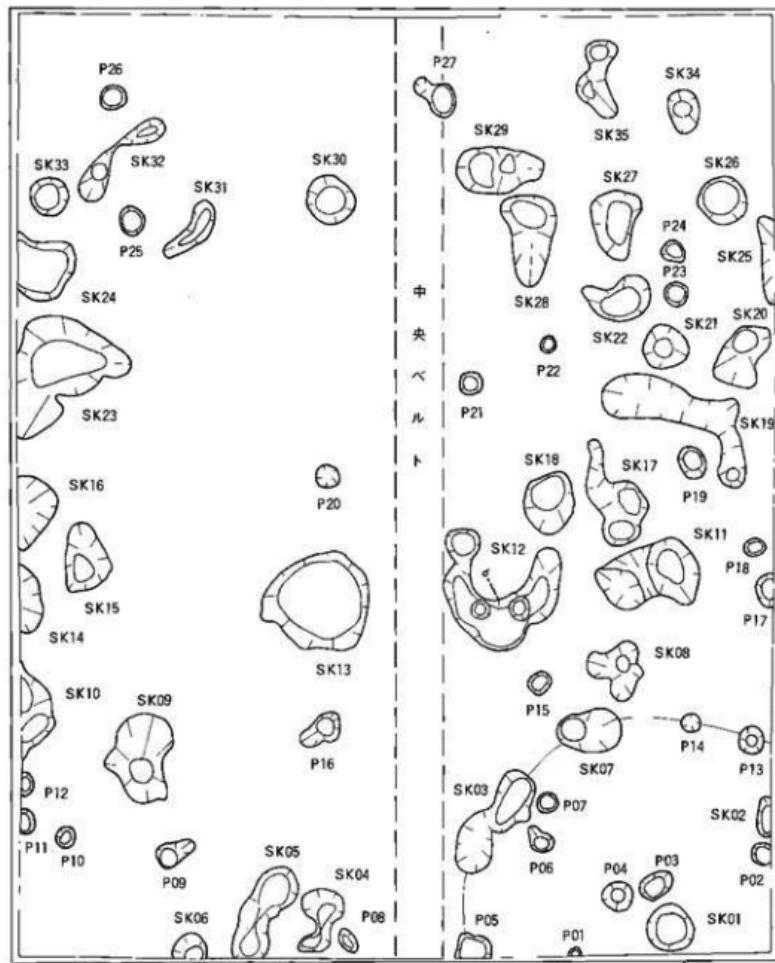
本調査区での調査は、後世の人为的攪乱された1・2層においては実測は行わず、層名を記して採集のみとした。3層以下は層位、平面及び垂直分布も含めて実測し、検出した遺構はその都度実測するように努めた。しかし同一層内での遺構の把握は難しく、見逃した遺構もあるかと思われる。また中には上位層からの陥入遺構と、同一層内における遺構との差異が把握しきれなかったものもあるかも知れない。



第24図 遺構断面図

2. 各遺構の概要

住居址（第23図・図版12-1） 本住居址は、調査区の北側のほぼ中央に検出された遺構で、カマド位置から想定すると北西-南東、北東-南西の方向をとる。検出面は4層黒褐色土の中位面で、床面の標高約269.59mを測る。残存部は北西-南東方向約2.3m、北東-南西方向の最長残存部は約1.5mを測る。本住居の検出は灰褐色土の貼り床、カマドの石体及びその周辺の焼土によって確認されたものであって、他の側壁や柱穴坑などの遺構については埋土が同一層であったためと思われるが、捉らえることができなかった。しかし床上に出土した8世紀初めと想定される土師器（第26図・図版11-1・図版13-2）の地域的な時期性からみて、おそらく側壁をもった竪穴式だったものと考えられる。



第25図 遺構図

南東辺に検出されたカマドは、15~20cm大の河原石で縦方向に右袖2個、左袖3個をもって構築する。下方の石体には貼り付けたような白灰色の粘土帯がみられ、周辺約1m範囲は焼土で橙褐色を呈していた（国版12-3）。カマドには架構した様子はみられず、石体も少ないことから後世に

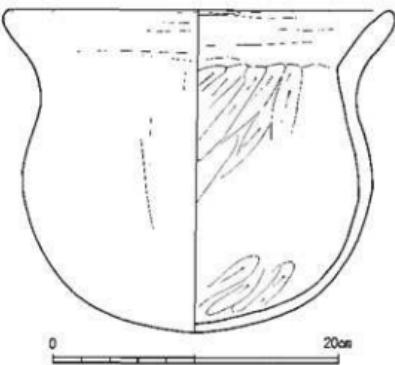
一部は抜き取られた可能性がある。また灰褐色の粘土で貼床された床面は、厚い部分でも2cm余りと薄く、周辺部に向ってその粘土層も尖滅する。

また、本住居の南東側及び北東側の2箇所には、ほぼ同レベル上に廃棄場として考えられる炭化物の集積跡が検出された。前者は短径57cm、長径70m、後者は短径50cm、長径60cmを測っていずれも梢円形を呈し、その厚さは10cm余り堆積する。

弥生・縄文遺構（第24図・第25図・図版13-1） 4層黒褐色粘質土の下層面から、
弥生後期と想定される遺物と遺構が検出さ

れた（B調査区遺構計測表）。これらの遺構は、5層灰褐色砂土に至っており、大半は4層の黒褐色土が陥入する。しかし遺構検出面である4層と5層の層界及びその下位は、円碟が填充していく遺構の輪郭性を欠ぎ、したがって計測等については不明確のものもあるであろう。また弥生後期と想定される遺物は、4層中位面から下位面にかけて出土していることから、その構築面は4層中位面であった可能性がある。これらの遺構や遺物は、調査区の北半でも特に北東面に集中しており、その拡がりは並家の山裾側に偏在しているものと思われる。したがって狭隘な調査区からは、体系的な形態などは把握することができなかった。

また調査区の南東端の局地からは、縄文後期と想定される遺構の一部が検出された。検出面は4層下位面からで、杭内には黒褐色土及び、ブロック状に灰～褐色土が嵌入する。その遺構はP05・P13・P14・P17・SK01で確認され（B調査区遺構計測表）、不特定の遺構も介在しているが、SK01以外のピットは凡そ周囲しているように捉えられる。しかし内状には竪穴などの遺構は認められず（第24図）、偶然的な一致かも知れない。ただし本遺構と重なって縄文土器が出士しており（第27図・図版14-1），該期の遺構の一部であることは確かであろう。いずれにしても部分的な検出であること、陥入坑の層状が砂礫であることなどから明確な結論は抽出することはできない。またこの拡がりは、おそらく南東20m測る焰硝田遺跡（第3図）に連なり、山裾側にその集落が存在するものと思われる。



第26図 土師器実測図

第4節 出土遺物

1.はじめに

本調査区から出土した遺物は、コンテナ一箱にして4箱ほどであった。これらの各遺物を出土比率からみると、弥生土器35%・石器およびその剝刃類25%・上師器15%・陶磁器類10%・炭化物7%・繩文土器3%・須恵器などのその他のもの5%であった。

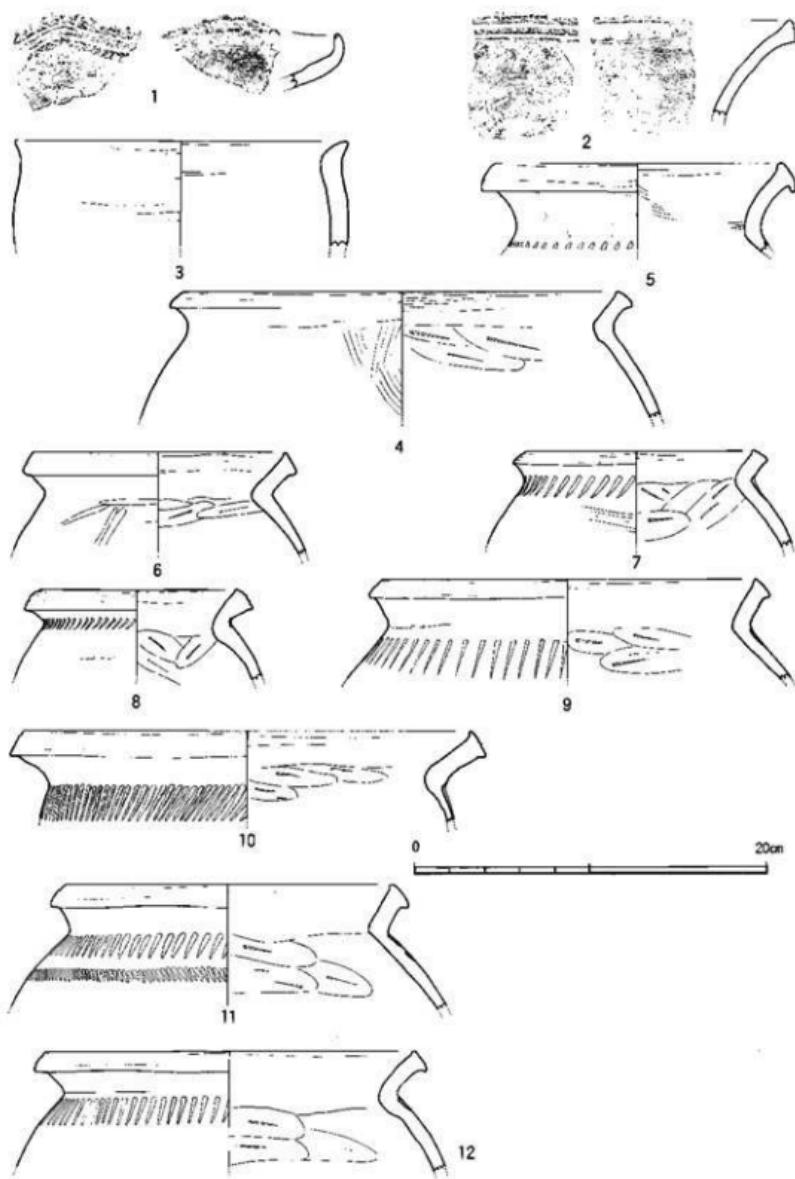
またこれらの出土層は、上層の1・2層から陶磁器類や若干の石器剝片、3層および4層上位面から土師器、4層中位面から下位面にかけて弥生土器・下位面および5層上位面にかけて繩文土器といった、凡そその層序で出土した。

2・実測遺物

繩文土器（第27図・図版14-1） 1・2は、調査区の南東端の4層下面に出土した精製土器の口縁部。前者は山形の突起部をもち、その頂部の内面側に1本の刺突を施す。外面口縁部には縁部に沿って2本の沈線を施し、その側辺に貝殻による擬似繩文を施す。内外面とも精緻にヘラで磨かれ、橙褐色～暗褐色を呈する。後者は頸部から強く外反して立ち上がり、口縁端部はやや肥厚して拡張したもの。その拡張した外面には2本の沈線を施し、口端部に繩文を施す。内外面ともヘラ状工具によって研磨され、焼成は堅緻である。両者とも彦崎KI式と併行期のものであろう。

弥生土器（第27図・第28図・図版14・図版15-1） 4～18は弥生土器。そのうち4は口縁部が上下に僅か拡張した壺の口縁部。胴部外面はハケ調整、口縁部はナデである。内面の口縁部は横向向のハケ調整で、頸部下半はケズリ。5は、壺の口縁部で、口縁端は丸みをもって下方に長く拡張する。内外面ともハケ調整の後、横ナデとする。頸部外面に刺突文を施し、色調は黄褐色～橙褐色を呈する。6は、口縁端部が僅かに上方に拡張し、その端面および全体はナデ調整。内面頸部下半はケズリで、焼成はきわめて良好である。7・8は、口縁端部が僅かに上下に拡張され、頸部に板状工具による押圧の列点文を有するもの。両者とも外面にハケ調整がみられ、後者の口縁部は丸みをおびる。9～12は、やや大きめの壺で、頸部外面に長めの押圧した列点文を有したもの。口縁端部には擬凹線文を施し、その部端は上下に拡張する。いずれも頸部外面に板状工具による押圧の列点文がみられ、そのうち11は2段に施す。口縁部の内外面はナデとするが、頸部下半の内面はいざれもヘラケズリ調整である。

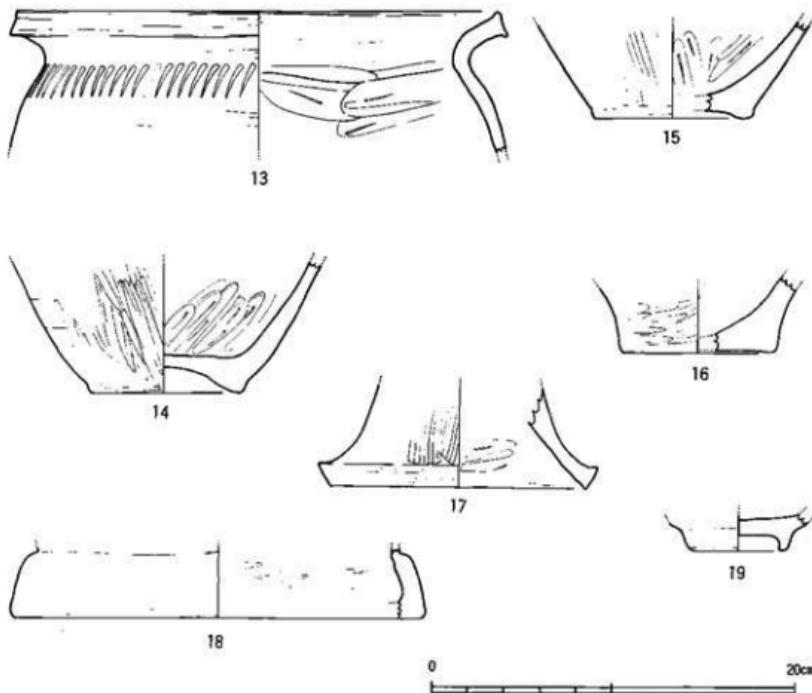
14～17は底部。そのうち14は凹み底で、外面をヘラで成形した後、ナデ調整したものと思われる。内面は粗いヘラケズリで、2～3mm大の砂粒を含み、色調は黄褐色～褐色を呈する。15も凹み底で、底部面は丸みをもって外側にふくらむ。外面には縦方向のハケ調整をした後、ナデを施す。胎土に多く砂粒を含み、橙褐色を呈し、内面は煤が付着する。16は平底で、橙褐色を呈する。17は、高杯



第27図 遺物実測図(土器) 1

B 調査区遺構計測表

遺構	短径	長径	深さ	検出面標高	摘要	遺構	短径	長径	深さ	検出面標高	摘要
P01	14 ^m	—	—	—		SK05	32 ^m	—	20 ^m	269,513 ^m	
P02	22	24	—	—		SK06	—	—	14	269,563	
P03	24	36	27	269,463		SK07	40	70	27	269,423	
P04	30	32	20	269,463		SK08	30	62	19	269,333	不整形土坑
P05	—	—	17	269,493	灰褐色土嵌入（縄文遺構？）	SK09	60	94	10	269,523	
P06	20	32	24	270,483		SK10	—	—	9	269,553	
P07	22	22	10	269,463		SK11	54	100	21	269,253	
P08	16	28	12	269,513		SK12	54	—	25	269,403	弓形状土坑
P09	24	42	8	269,553		SK13	94	114	8	269,463	円形状土坑
P10	20	24	12	269,543		SK14	—	—	5	269,503	
P11	—	—	6	269,543		SK15	48	72	19	269,503	
P12	—	—	4	269,523		SK16	—	—	12	269,483	
P13	24	28	17	269,373	灰色土嵌入（縄文遺構？）	SK17	46	—	21	269,333	不整形土坑
P14	20	20	12	269,373	灰褐色土嵌入（縄文遺構？）	SK18	52	66	7	269,353	
P15	20	26	21	269,403		SK19	40	—	14	269,323	弓形状土坑
P16	30	48	4	269,463		SK20	38	68	5	269,233	
P17	—	—	10	269,323	灰色土嵌入（縄文遺構？）	SK21	46	48	10	269,233	
P18	18	24	11	269,323		SK22	40	70	10	269,273	
P19	26	34	13	269,333		SK23	—	—	21	269,483	不整形土坑
P20	24	26	10	269,473		SK24	—	—	4	269,333	
P21	24	24	8	269,303		SK25	—	—	8	269,243	
P22	16	18	6	269,293		SK26	50	54	28	269,243	円形状土坑
P23	24	26	12	269,253		SK27	44	72	13	269,263	涙滴状土坑
P24	22	26	12	269,273		SK28	44	96	8	269,293	涙滴状土坑
P25	26	30	13	269,353		SK29	50	92	11	269,293	涙滴状土坑
P26	24	28	12	269,323		SK30	50	52	11	269,273	円形状土坑
P27	28	—	8	269,233		SK31	22	74	24	269,353	
SK01	48	50	30	269,463	円形状土坑・灰色土嵌入（縄文遺構？）	SK32	24	116	17	269,353	
SK02	—	—	—	269,423		SK33	40	42	7	269,333	円形状土坑
SK03	38	120	18	269,473	不整形土坑	SK34	30	46	23	269,253	
SK04	30	64	15	269,513		SK35	34	80	16	269,263	

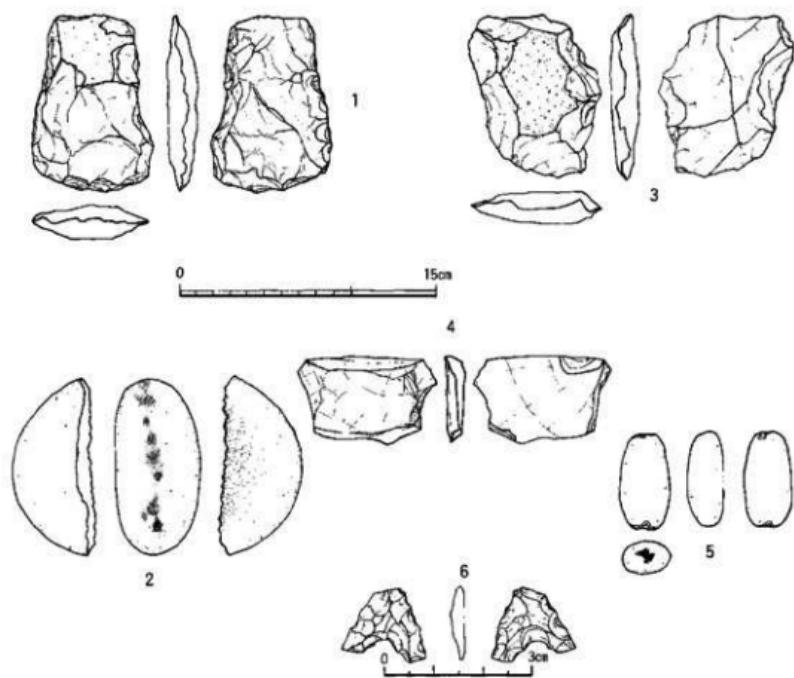


第28図 遺物実測図(土器)2

の脚部。外面はハケ調整とし、脚端部の拡張面は擬円線文のように見える。内面はケズリで、黄褐色を呈する。18は下面から内傾ぎみに立ち上がり、段を有して薄くなり、口縁端と思われる上方は欠損する。外面には赤褐色の塗彩がされ、内面はヘラ調整の後、ナデを施す。このようなリング状のものは本町の松田原遺跡でも採集されており、器形は不明。これらは伊佐座式の口縁部に似ているが、塗彩などの施法からみて、器高の低い器台かも知れない。

陶器 19は、2層容土から出土した陶器の高台部。

石器(第29図・図版15-2) 1は、玄武岩質の打製石斧。器高10.5cmを測る楔形で、やや裏面側に反る。2は、半壊した花崗岩質の磨石。裏面の平坦面は摩擦痕でスペベし、周縁部には打撲痕がみられる。3・4は、安山岩質の石核。そのうち前者は背面に自然面が残り、周縁部を粗く剝離されている。細部調整をされていないものの、鋭利な剝片面からは削器的な利器であったと思わ



第29図 遺物実測図(石器) 3

れる。後者は、長方形の石核から剝離された石核石器であろう。5は、砂岩質の打欠石錐。6は、安山岩質の凹基無茎の石鎚。

(渡辺友千代)

註

- (1) 松木岩雄 「石見地域」『赤生土器の様式と編年』—山陽・山陰— 岩木社 1992年5月

第5章 終りにあたって

1.はじめに

本遺跡については前章でみてきたとおりであるが、両調査区とも限定した発掘面積および完掘していない部分もあって、全体像や性格についてははっきりしない。しかし、本章では事証できることを踏え、また調査の段階で感じ得たことも合せ、特に配石遺構群について考証しておきたい。

2.両調査区の概要

まずA調査区であるが、4層黒褐色土の下層面から5層黄褐色砂土層にかけて縄文晩期と想定される生活の痕跡が一部確認された。これらに伴う遺物は10数片と僅少で、また明確に把握できた遺構も2基にすぎなかった。しかも検出位置は西半の北端面に限定されており、時期および生活痕跡は確認できるものの、それ以上の他の遺跡性格等についてはまったく明かにできなかつた。また後世の人為層ともいえる1・2層で採取された比較的多くの縄文遺物については、水田造成時による削平等の混入品と考えられ、当該遺構のものとは別隔のものと判断している。

また、つぎに復合する弥生中期の配石遺構群については後述することにし、その上位面3層および4層上面に検出された中世以降と想定される生活面は、鉄滓や羽口などの生産遺物の出土によって製鉄遺跡であった可能性がある。時期は共作した青磁等からみて中世末から近世初めごろの所産と考えられるが、遺構等については上位層ということもあって削平されは可能性があり、詳細については明かではない。また鍛などは出土していないが、量的に少ない鉄滓（スラグ）、あるいは鍛冶に使用されたものと思われる地床炉などの検出からみて、おそらく鍛冶炉などの生産遺跡が存在していたものかも知れない。いずれにしも断片的な遺物、あるいは余りにも頻出した柱穴址からは掘立柱形態などにおいても捉えられることはできず、想像の域を出ない。

5層からなるB調査区においては、4層の黒褐色土上面からカマドを配した住居址1基が検出された。床上から出土した土師器から7世紀終末から8世紀初頭のものと考えられるが、埋土が单層であったために住居形態などについては判然としなかつた。また本層の下位面から5層灰褐色砂質土層にかけて弥生時代の遺物・遺構が比較的まとまって検出されており、これらは上器形態から後期初めのものと想定できるものであった。しかし遺構においては砂礫を作り下位面で確認されたため、柱穴などの遺構群からみる限り該期の住居址が存在したであろうが、明確に判断することはできなかつた。また調査区の南東端に検出された縄文土器数片は、彦崎K1式に位置付けられるもので、当角方向に縄文集落が営まれていた可能性が強く、それは周知の遺跡である焰硝田に連関するものと考えられる。

3. 配石遺構群について

その配石遺構は、共伴した土器形態からみると倒「L」字形の口縁をもち、その下位に多条のクシガキ直線文、さらにその下方にヘラによる刺突列点を施したものや、また口唇端面に斜向などの有文を配した朝顔形の壺などの他のものを含めてその器形、あるいは調整方法などから弥生前期の後葉から中期ごろのものと想定できるものと考えられる。^①これらの共伴遺物は、特に上器においては配石遺構に伴い、殊に整齊な西半部では顯著であった（これは東側に向って標高が上昇していることにより、上面が水田造成時に削平されたことから生じたものであろう）。これらの上器は配石上坑内は稀で、部上に検出を多とし、SK08・SK11ではその出土の仕方から獻供されたのではないか、という思いを推測させる状況であった。しかし、これらの配石遺構が墓地あるいは祭祀場としての機能をもったプレイス（場所）であったかは定かではなく、それを匂わす骨片あるいは呪術的遺物等は確認されていない。ただし石器類の遺物では、剝片は比較的検出されているものの、生活具としての石斧（繩文期の可能性が強いが）などは数点ときわめ少く、そこには非日常的なプレイスとしての存在が認められないでもない、と考える。確かに遺物からは墓地（祭祀場）であるという証拠立てはできないものの、配石形態からは繩文時代から引き継いだ墓地の様相を持ち合せていると想定される。そうであるとすると本遺跡の狭隘な土廣からは、火焼などによる二次的な埋葬が行われた再葬墓であったことが想像され、また複数配石遺構としたものは、埋上などの検出状況からみて、おそらく一括的同時に行われたものであろうと考える。

また一方、並石配石遺構としたSK05などは、前述の非日常的プレイスの存在を思考的に肯定される材料を備えているように感じられるのである。つまり当坑は再生（環魂）儀礼が行われた台座であったのではないか、という様相を呈しているように思われる。それは並石された下端を平坦に整えているとともに、下端は凹凸し、その下面に配された石躰との間隔には挙大ほどの狭隘であって、そこには効用的空间は見出せないのである。そのことは並石の上端が重要な位置を示していたということになるであろう。ならば、敷石化居であったのではないだろうか、ということを考えられるが、上屋を支える柱穴位置が不合理であり、しかも埋土関係からみてもその時期は異っている（後世のもの）。また1.3m×1.8mでは狭すぎ、並石下面の構築法においても精巧すぎるのではないかと考えられる。もし、これが箱式石棺等の底石部分だとすると側石の跡やその石体も確認されておらず、また形態的にも大きく異っていることから否定できるであろう。

これらの疑問を証す鍵となるものに、本坑の周縁部を対をなして取り廻む小ビット（4～10cm）群に、その糸口があるように考えられる。その整齊と並行するビット群は、太さからみてもとても上屋を支えられるものではなく、また、その形態からは明快な構築法が浮かび上がってこないことから、恣意的であるが、私はそれは“靈壇”の形跡ではないか、と考えておきたいと思う。その壇

も、おそらく古くから神靈が依り置くといわれる楠などの青々とした常緑の樹木をもって設えていた可能性もある。このように本坑が神聖な“場”であったことらしいことは、一方で下面にみられる石礫を填充させた構築法などにも窺い知ることができるが、具体的にはそこでどのような祭祀が行われていたのであろうか。これについて、さらに重ねて恣意を述べるならば、時期および立地は異にするものの、それは国譜り神話にみるコトシロヌシの海中への隠退(死を意味したものか)の場面「即ち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して隠りき…」⁽¹⁾ (古事記)に類似したような祭祀がそこで行われたのではなかったか、と私は読みとりたいのである。

確かに本坑は、縄文時代から引き繼がれてきたらしい他の配石とは形態的にも異質で、上述したような別機能をもった施設だったと思われるが、しかし時期的には他の配石遺構のものと同時的に発生したものではないであろう。というのは、本坑の下面には縄文時代から引き繼がれた本来的な配石遺構の2・3基があった様子が窺われ、それを半壌した上に重複して設えられていることから判る。そのことは、そこに時間的時期差があったことを意味するものであり、したがってこの斎場的な施設は、該期のうちでも終末ものであったと結論付けておきたいと思う。

(渡辺友千代)

参考・引用文献

- (1) 松本岩雄『石見地域』『弥生土器の様式と編年』(山陽・山陰編) 熊本耳社 1992年5月
- (2) 校注・訳者 萩原浅男・鴻巣隼雄『古事記 上代歌謡』角川小學館 昭和53年7月10日



1. 遺跡遠望



2. 作業風景

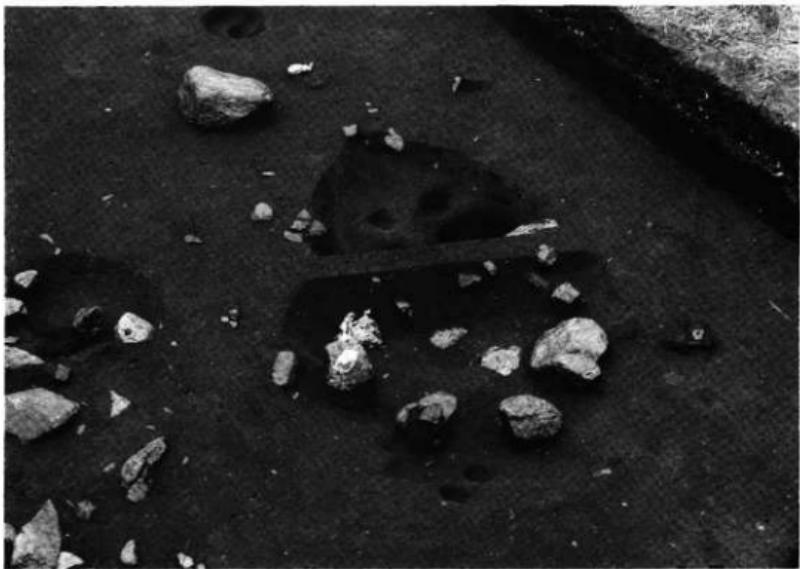
図版 2



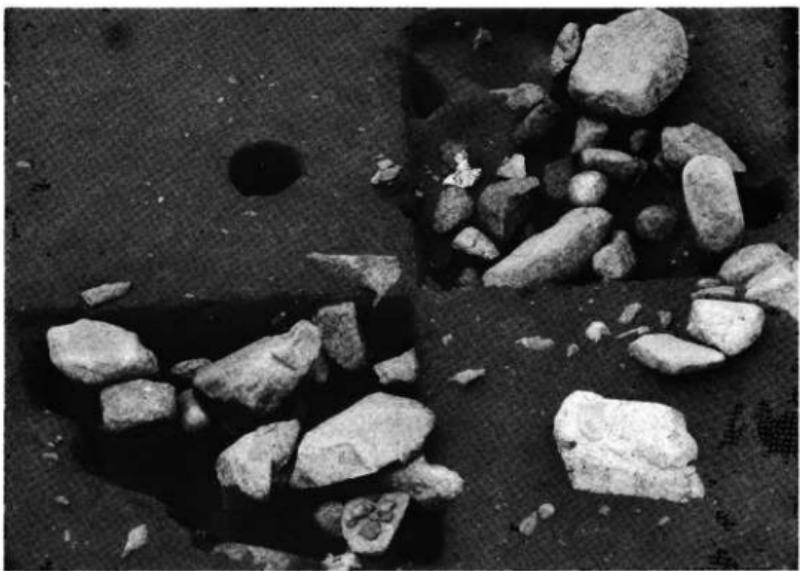
1. 配石、遺物出土状況 (SK-11)



2. 層界に検出された遺構面



1. SK-17土坑状況(東から)



2. SK-08土坑状況(南から)

図版 4



1. 調査区東半の立石状況(北東から)



2. 焼土Ⅱ土坑状況(東から)

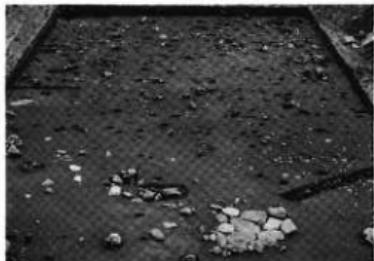


1. SK-08検出状況

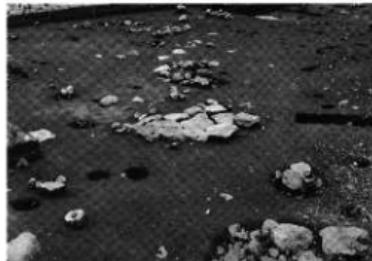


2. SK-05検出状況

図版 6



1. 西から見た A 調査区



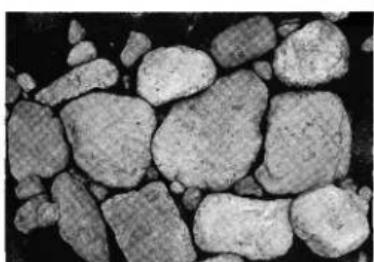
2. 南西から見た配石遺構群(西半部)



3. 西から見た SK-05



4. 北から見た SK-05



5. 真上から見た SK-05



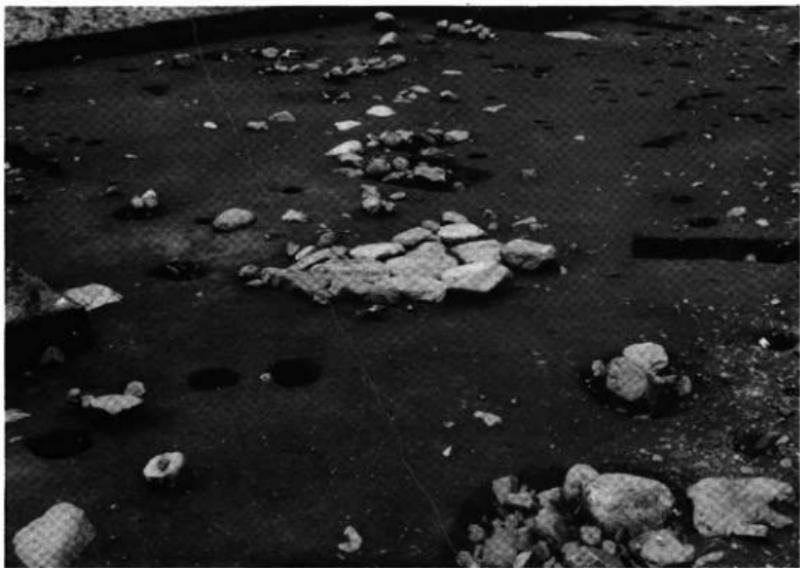
6. 北半部の配石を取り除いた状況(北から)



7. 北半部の配石を取り除いた状況(西から)



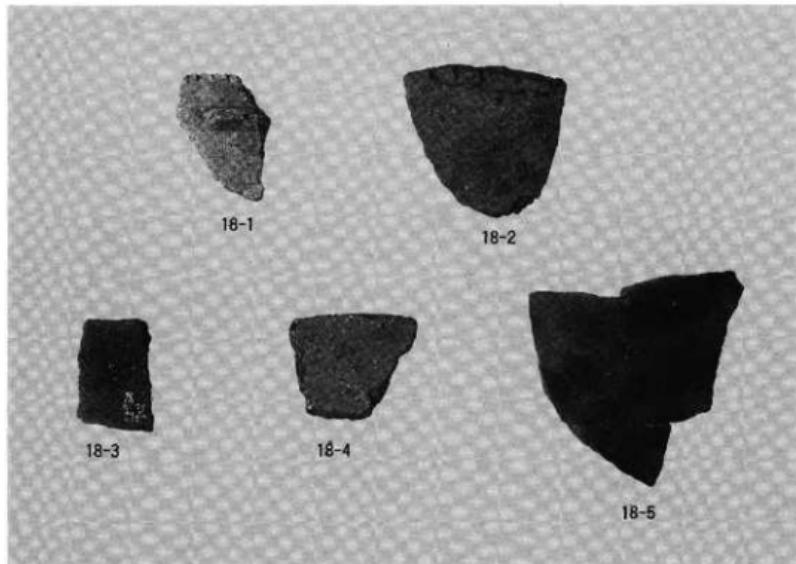
8. 下層面状況(西から)



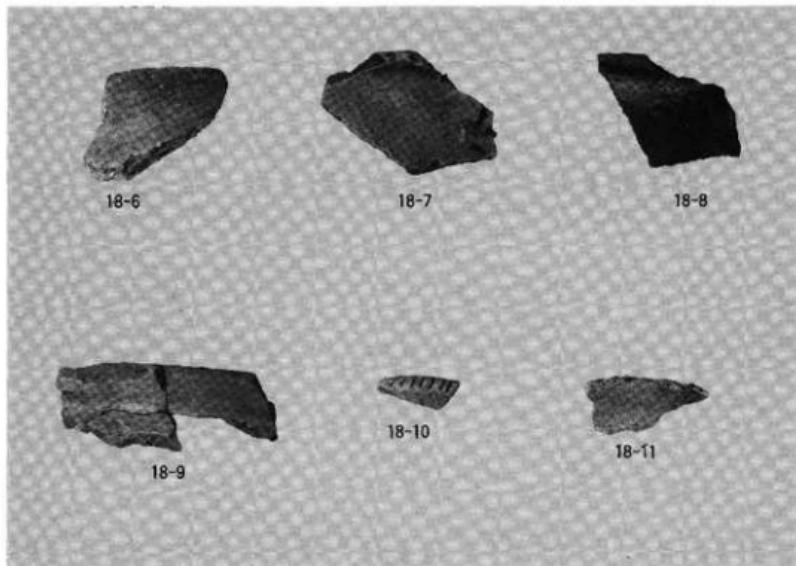
1. 南西から見た配石遺構群(西半部)



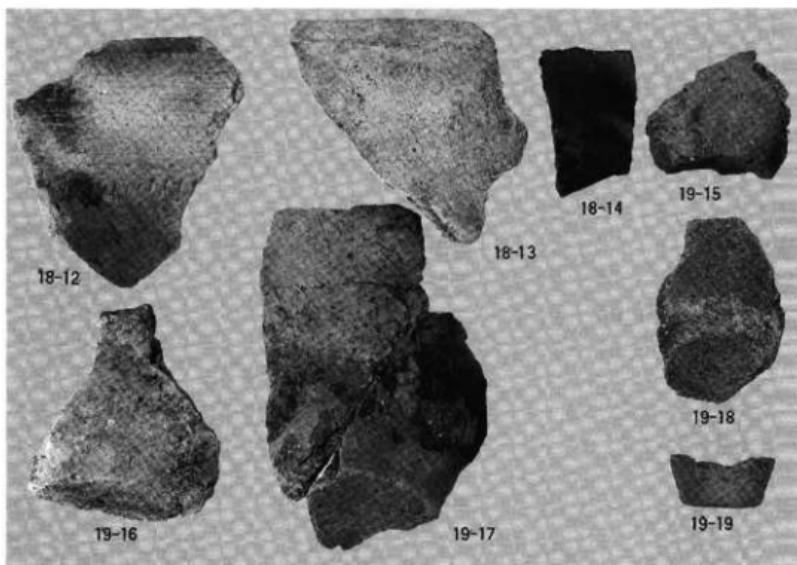
2. 西から見た A 調査区全景



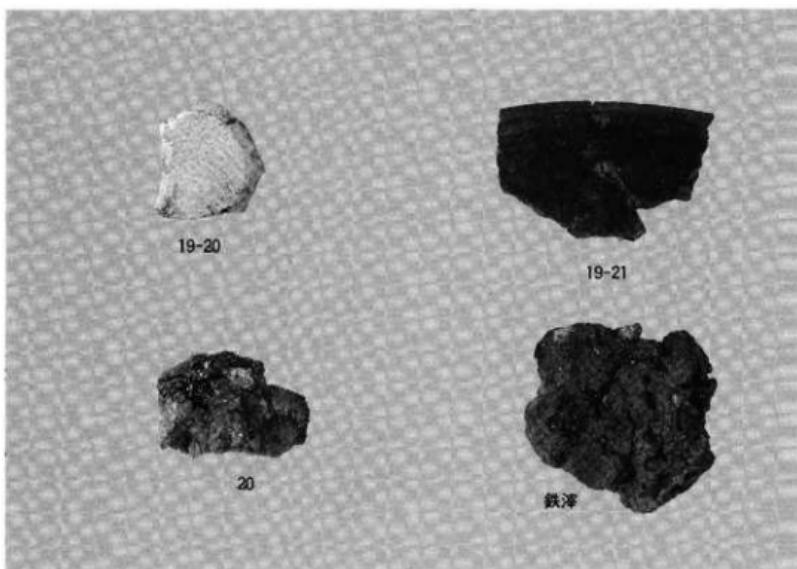
1. 縄文土器



2. 弥生土器(1)

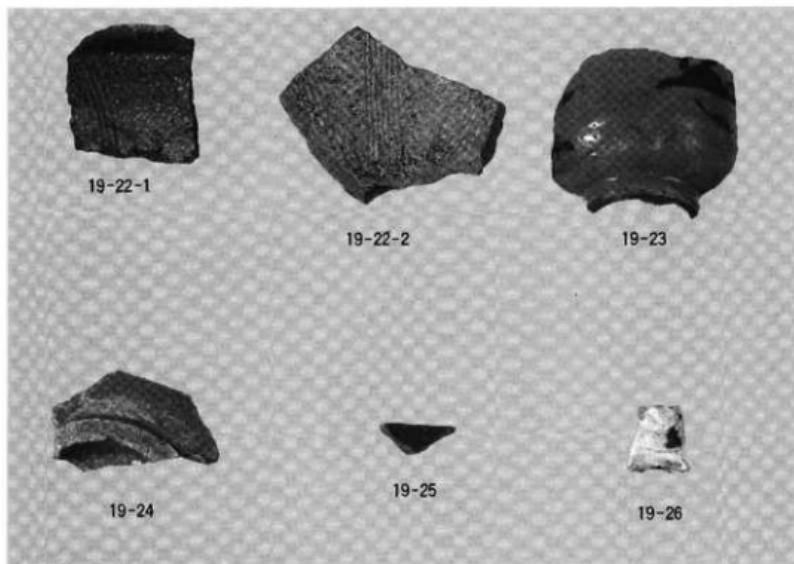


1. 弥生土器(2)

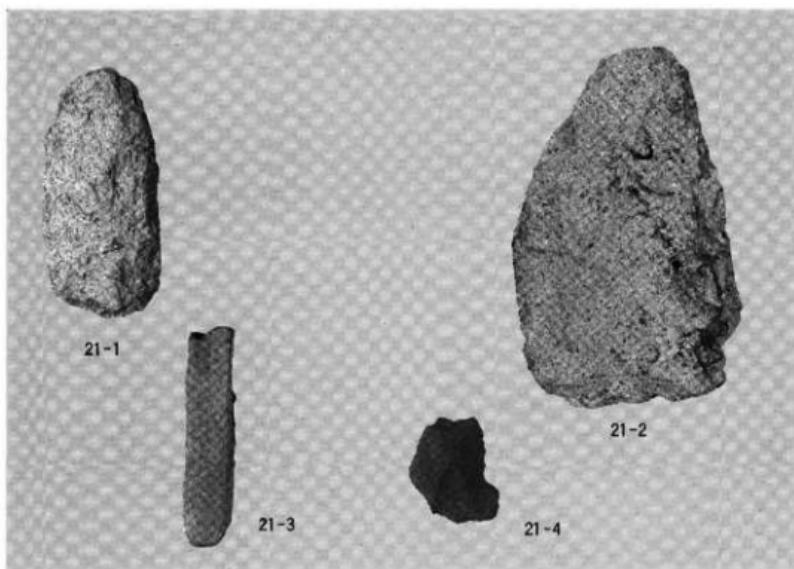


2. 土師器・瓦器・羽口・鐵澤

图版10



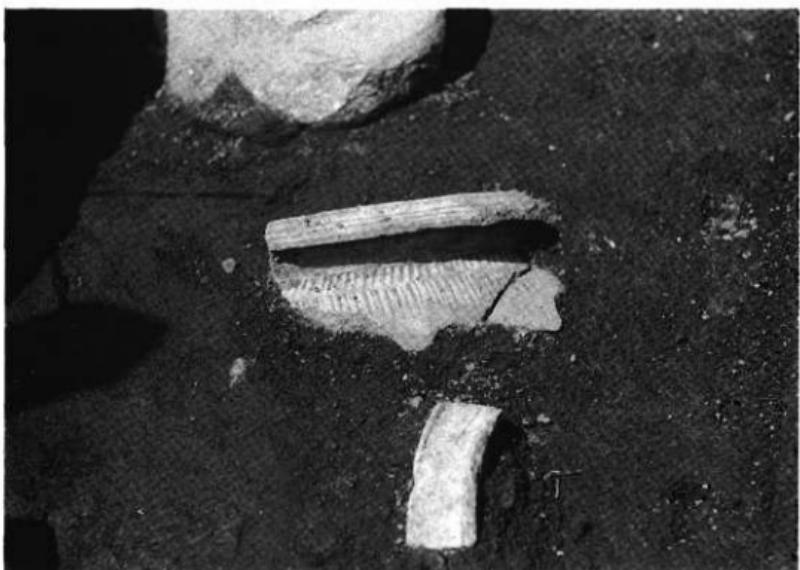
1. 磁 器



2. 石 器



1. 土師器出土状況 (B 調査区)

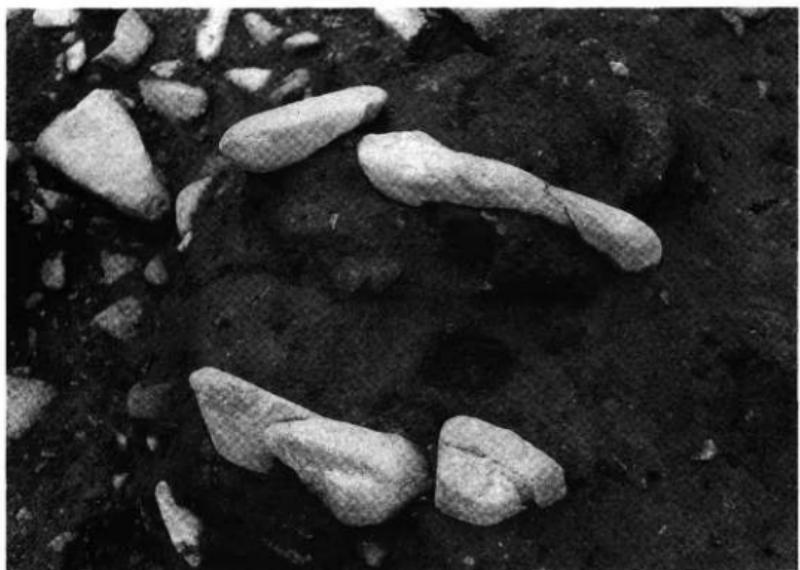


2. 弥生土器出土状況 (B 調査区)

図版12



1. 中央トレンチに検出されたカマド址(B調査区)



2. 北から見たカマド址(B調査区)

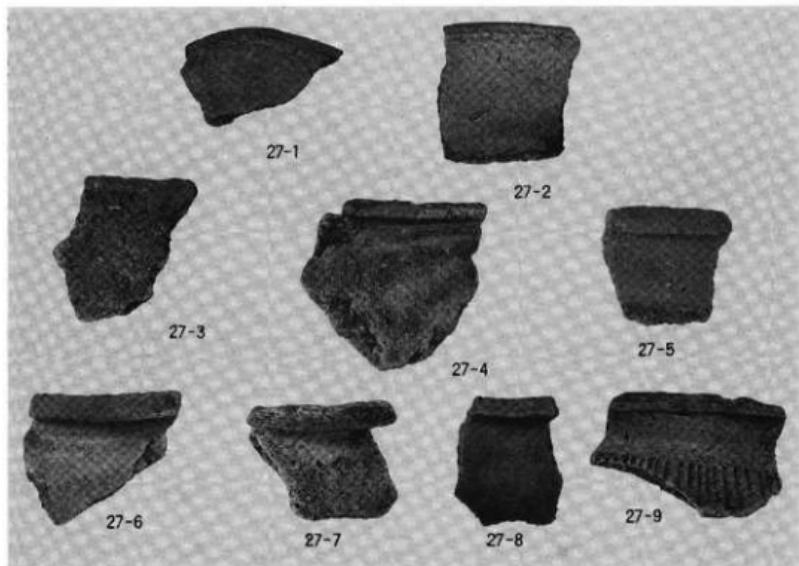


1. 南から見た調査区(B調査区)

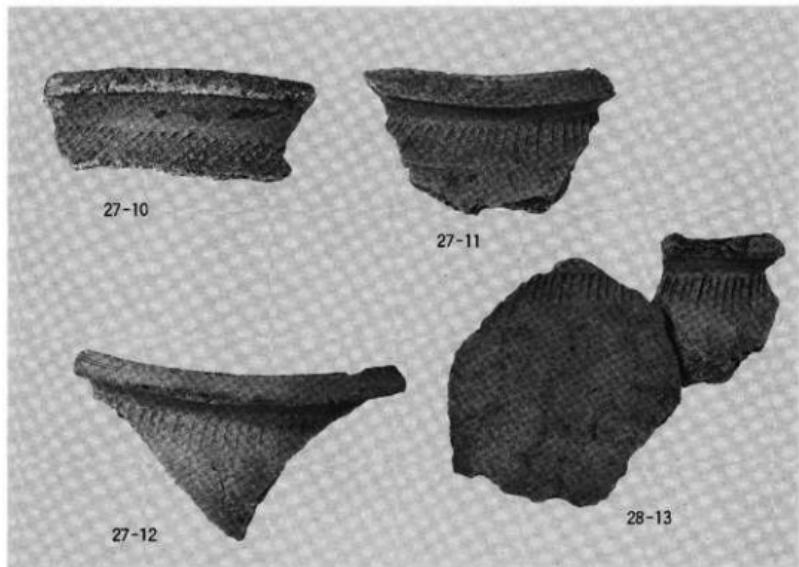


2. 黒褐色粘質土層に出土した土師器(B調査区)

図版14



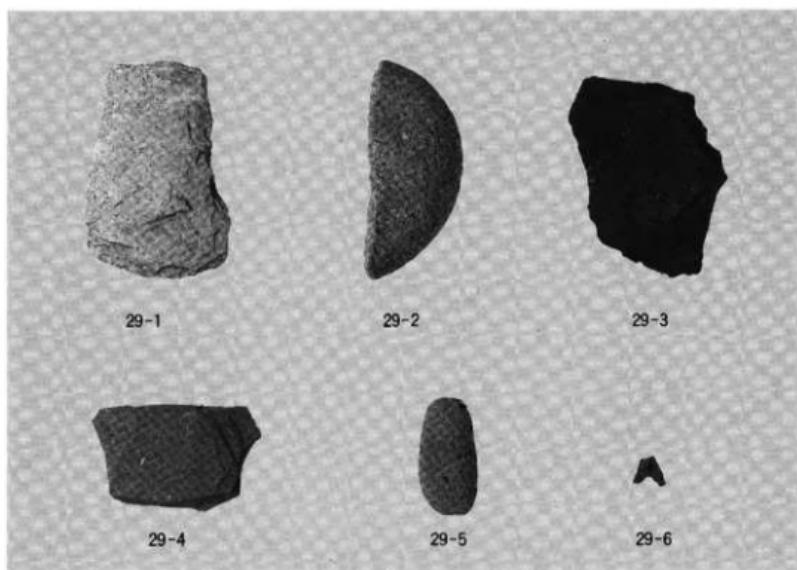
1. 繩文土器・弥生土器(B調査区)



2. 弥生土器(B調査区)



1. 弥生土器(B調査区)



2. 石器(B調査区)

平成5年3月10日 印刷
平成5年3月30日 発行

県営団地整備事業に伴う
下手遺跡発掘調査報告書

発行 北見町教育委員会
島根県美濃郡北見町1260
印刷 有株会社 谷口印刷
島根県松江市母衣町89
